時沢西萩林遺跡

— 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2007

群馬県勢多郡富士見村教育委員会

序

富士見村は上毛三山の一峰である赤城山の南面に位置し、豊かな自然とともに文化財の宝庫として知られています。発掘調査を行なった富士見村東南部の時沢地区もその例にもれず数多くの遺跡に恵まれ、遺物が濃密に散布しており、古代におけるこの地の繁栄を物語っているかのようです。

ここ数年は県都である前橋市の北に隣接する地理的な要因から宅地造成などの民間開発が増えています。今回の時沢西萩林遺跡発掘調査も宅地造成に伴って行なわれたものです。

発掘調査では、古代の竪穴住居跡から「上」や「真合」と記載された墨書土器が検出されました。「真合」は和名類聚集に見られる真壁郷のようです。渋川市北橘町真壁の地に推定される真壁郷と同じく、和妙類聚集に見られる時沢郷の名を冠する富士見村時沢の地で「真合」の墨書土器が出土したことは、現在と同様に古代においても両地域の活発な交流を物語っているようです。調査面積は決して広くありませんが、今回の発掘調査においても貴重な遺構と遺物が出土し大きな成果を挙げることができました。この発掘調査報告書が、多くの人々に活用され地域史解明の一助となることを願います。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただいた方々、調査をご指導いただいた方々、さらに真夏の厳しい自然条件の中で発掘調査に従事していただいた作業員の皆様に心より感謝申し上げ、序といたします。

平成19年3月

富士見村教育委員会

教育長　福　島　正　章

例　　言

1．本書は民間開発に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本遺跡は群馬県勢多郡富士見村大字時沢字西萩林219番１外に所在する。

3．現地調査期間は平成18年７月10日から平成18年８月11日までである。
整理調査期間は平成19年１月22日から平成19年３月16日までである。

4．発掘調査面積は780㎡である。

5．発掘調査は富士見村教育委員会が行なった。組織は以下のとおりである。
教育長　福島正章、事務局長　狩野透、事務局次長　狩野眞一、社会教育係主任　福田貫之

6．発掘調査及び整理調査は福田が担当した。また、遺構写真、遺物写真も福田が撮影した。

7．発掘調査により出土した遺物、図面類は富士見村教育委員会で保管している。

8．出土した墨書土器の判読及び解釈について、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団の高島英之氏から丁寧なご教示を賜った。

9．発掘調査及び整理調査において次の方々よりご指導・ご協力をいただいた。記して感謝を申し上げる次第である（敬称略）。
群馬県教育委員会文化課　　(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
伊藤順一　小川卓也　小林　修　小林　正　齋藤幸男　櫻井和哉　大工原豊　角田真也　水谷貴之
山口逸弘　山下歳信

10．発掘調査及び整理調査は以下の方々が参加した。
石黒秀男　井上武志　小見明美　狩野宇作　奈良美江　本望充子

凡　　例

1．本書で使用した地図は国土地理院発行１：50000地形図「前橋」、富士見村役場発行１：2500原形図を用いている。

2．遺構図中の断面基準線高は標高を表し、遺構図中の方位は座標北を示している。

3．遺構図の縮尺は、下記を基本とした。各挿図中のスケールを参照していただきたい。
全体図１/200　竪穴住居跡１/60　掘立柱建物跡　１/60　土坑　１/60

4．遺物図は下記縮尺を基本として掲載した。それぞれ図中のスケールを参照していただきたい。
坏・椀類１/３　甕１/４

5．竪穴住居跡等の遺構計測値の長軸・短軸は、上端を測った。また、残存状況のよい竪穴住居跡の面積は下端をデジタルプラニメーターで３回計測した平均値を記載した。

目　　次

序
例　言
凡　例

第１章　調査に至る経緯と調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と周辺の環境 …… 2

第１節　遺跡の位置…… 2
第２節　周辺の遺跡…… 2

第３章　調査の方法と基本層序 …… 5

第１節　調査の方法…… 5
第２節　遺構・遺物の概要…… 5
第３節　基本層序…… 5

第４章　検出された遺構と遺物 …… 7

第５章　成果と課題 ……19

挿図目次

第１図　時沢西萩林遺跡周辺の地形…… 1
第２図　時沢西萩林遺跡と周辺の地形…… 3
第３図　時沢西萩林遺跡基本層序…… 5
第４図　調査区全体図…… 6
第５図　１号竪穴住居跡…… 7
第６図　１号竪穴住居跡出土遺物…… 8
第７図　２号竪穴住居跡…… 9
第８図　２号竪穴住居跡出土遺物……10
第９図　３号竪穴住居跡……10
第10図　３号竪穴住居跡竈断面図及び出土遺物…11
第11図　４号竪穴住居跡及び出土遺物……12
第12図　４号竪穴住居跡出土遺物……13
第13図　５号竪穴住居跡……13
第14図　５号竪穴住居跡出土遺物……14
第15図　６号竪穴住居跡……14
第16図　６号竪穴住居跡出土遺物……15
第17図　７号竪穴住居跡及び５号土坑……15
第18図　７号住居跡出土遺物……16
第19図　１号堀立柱建物跡……16
第20図　１・２・３号土坑……17
第21図　４号土坑及び出土遺物……17
第22図　遺構外出土遺物……18

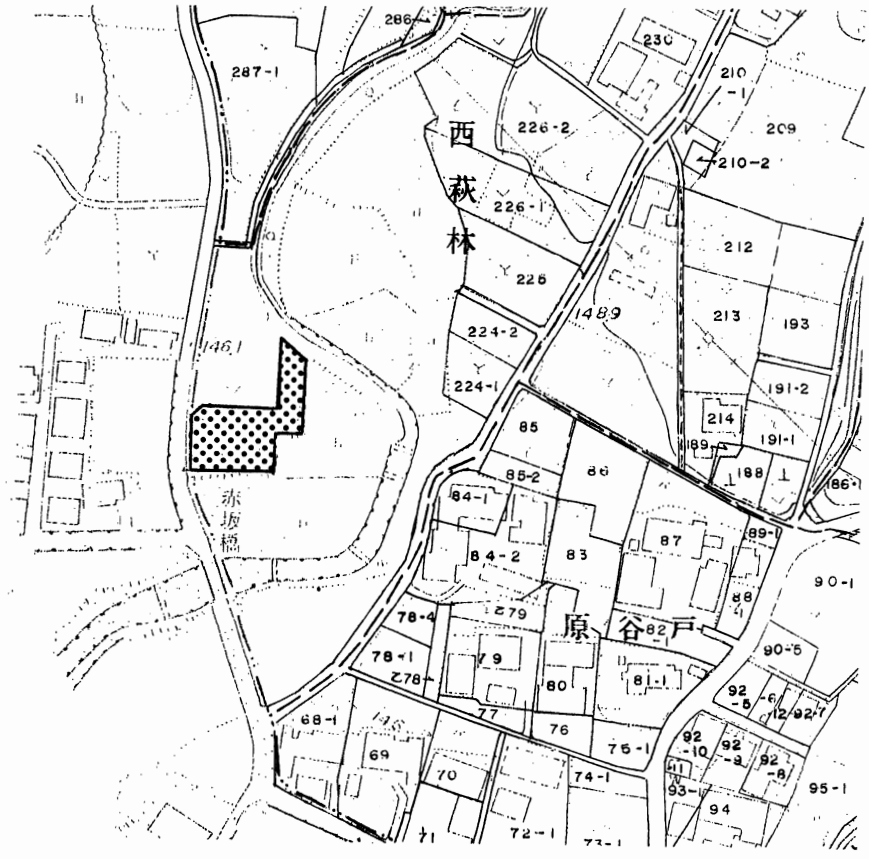
第１章　調査に至る経緯と調査の経過

平成18年５月中旬、事業主　栄進不動産　代表　五十嵐正より、群馬県勢多郡富士見村大字時沢字西萩林地内における宅地造成開発に係わる事業計画が富士見村教育委員会に掲示され、埋蔵文化財の有無ならびにその取扱いについて照会があった。この照会を受けて当教育委員会は、開発地は周知の遺跡である時沢西高田遺跡の近辺であるため工事着工前に試掘調査を行ない埋蔵文化財の有無ならびに遺構の分布状況を把握し、包蔵状況に応じた工事計画や保存計画をたてる必要があるとの回答をした。これを受けて同年５月24日に事業主より試掘調査依頼書が提出され、同年６月に富士見村教育委員会が試掘調査を実施した。試掘調査は、遺構の有無ならびに遺構検出面の確認を主目的に対象地内の地形に合わせて６本のトレンチを設定した。その結果、比高差のある北側から竪穴住居跡や柱穴が検出された。

試掘調査の結果をもとに事業主に現地保存を要請したが、開発の意思が固いため、開発を行なう際には工事に先立ち発掘調査を行い記録保存の措置を執る必要がある旨を説明した。その後、事業主と発掘調査実施期日、発掘調査費用等について再三に亘る協議を行なった結果、発掘調査を行ない記録保存の措置を取ることで合意を得ることができた。

その後、平成18年７月５日付で事業主　栄進不動産　代表　五十嵐正と富士見村長　星野好孝との間で「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」が締結され、同年７月10日より発掘調査を実施することとなった。

発掘調査期間中は、梅雨のシーズンであり度々降雨にみまわれ調査区が水没するなど調査に支障をきたしたが、平成18年８月11日に現地での調査を終了した。



第１図　時沢西萩林遺跡周辺の地形

第２章　遺跡の位置と周辺の環境

第１節　遺跡の位置

時沢西萩林遺跡が所在する富士見村は、群馬県の県庁所在地である前橋市の北側に接し、上毛三山の一峰である赤城山の南西麓から山頂までの東西約６㎞、南北約19㎞を村域とする狭長な村である。標高は赤城火山の外輪山の一つである黒檜山山頂（1,827m）を最高点として急傾斜をもって南下する。標高約450m付近を傾斜変換点として傾斜が緩やかになり、前橋市と接する大字原之郷付近で標高150m程となる。

標高約450m付近の傾斜変換点を境として北東の山岳部と南西の裾野部に大別される。さらに裾野部は東方の扇状地形（白川扇状地）と西方の比較的開析谷の発達した丘陵状地形とに区分できる。時沢西萩林遺跡は白川扇状地に立地し、竜ノ口川により形成された右岸の台地上に立地する。

第２節　周辺の遺跡

本村では、昭和29年に刊行された『富士見村誌』編纂事業に伴う尾崎喜左雄博士（群馬大学史学研究室）による石室の測量、さらに群馬県遺跡台帳作成に伴う分布調査が行なわれてきた。そして昭和58年度に行なわれた土地改良事業に伴う田中田遺跡発掘調査を皮切りに、村内遺跡発掘調査事業が始まり現在までに多くの遺跡が発見・調査されている。ここではこれらの資料とこれまでの発掘調査をふまえ、時沢西萩林遺跡（１）周辺の遺跡について概観してみたい。

【旧石器時代】

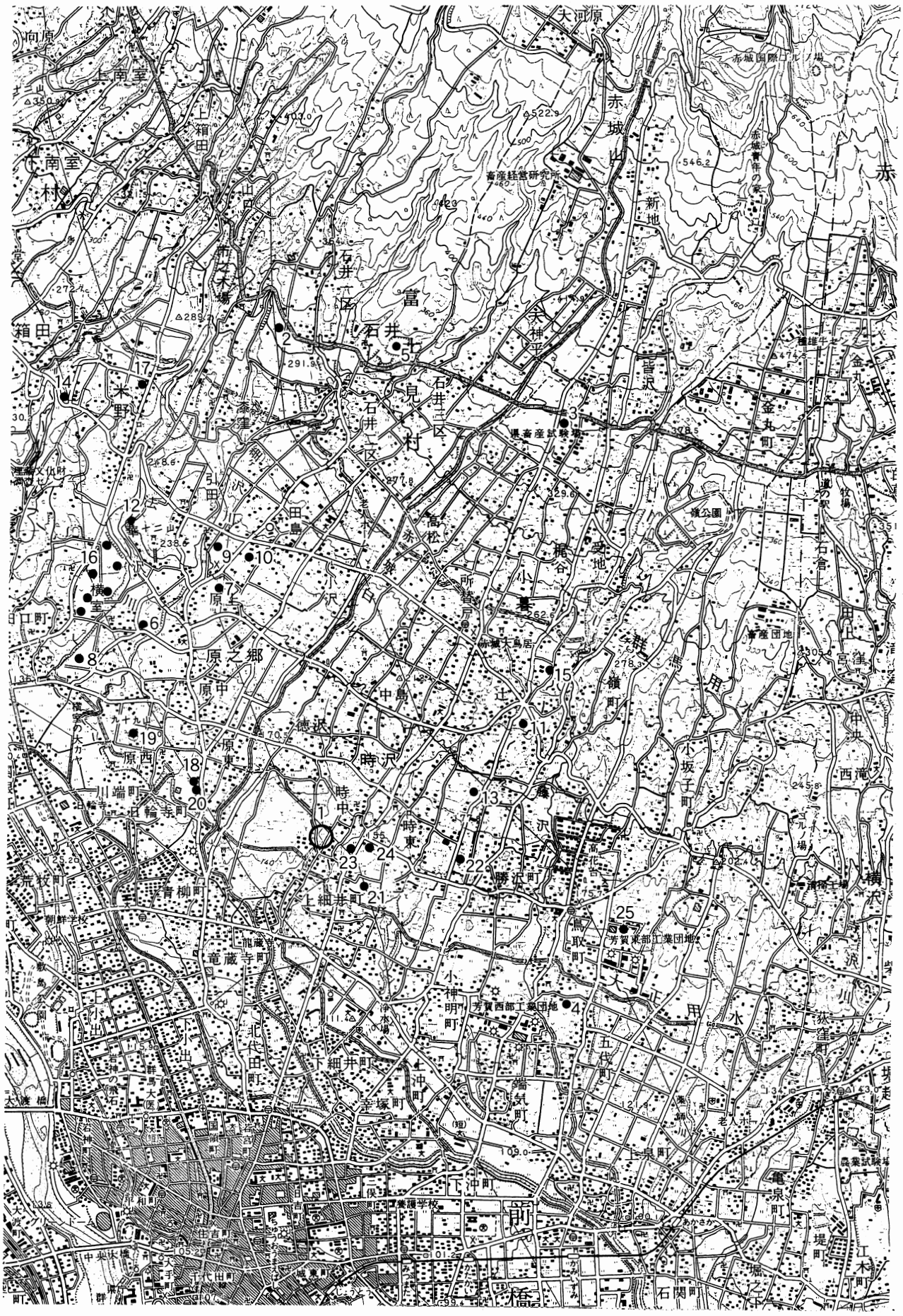
標高約300m前後に位置する小原目遺跡（２）から剝片が、標高約350m前後の小暮東新山遺跡（３）から槍先形尖頭器の製作工程で出ると考えられている剝片と全国的に類例の少ない住居状遺構が確認されている。また、標高約130m前後に位置している前橋市鳥取福蔵寺II遺跡（４）からは剝片や礫器の他に細石器、石刃が出土している。

【縄文時代】

標高約450m付近の傾斜変換点を境とする裾野部の台地上を中心に分布し、数多くの遺跡が存在する。時期的に前期と中期は遺跡数が多いが、草創期から早期、後期から晩期にかけては遺跡数は少ない傾向にある。

早期の代表的な遺跡として坂上遺跡（５）が挙げられる。坂上遺跡からは押型文土器、撚糸文系土器、鵜ケ島台式の条痕文系土器が確認されている。また、少量ではあるが、田中遺跡（６）、久保田遺跡（７）からも条痕文系土器が出土している。前期前葉の二ツ木式期では田中遺跡、久保田遺跡が代表的な遺跡である。ついで関山式期には田中田遺跡（８）、黒浜式期、有尾式期には由森遺跡（９）があり、住居跡等が確認されている。

諸磯式期には数多くの遺跡が発見され、遺物も多く出土している。諸磯ａ式期には白川遺跡(10)、寺間遺跡(11)が、諸磯ｂ式期では愛宕山遺跡(12)、上百駄山遺跡(13)、向吹張遺跡(14)、広面遺跡(15)では住居跡、土坑が確認された。このうち、愛宕山遺跡は土器の質・量ともに豊富であり、該期の貴重な資料が出土している。諸磯ｃ式期では広面遺跡が著名であり、諸磯ｂ式からｃ式への変遷を考える上で、貴重な資料が出土



第２図　時沢西萩林遺跡と周辺の地形

している。また、陣場・庄司原遺跡群(16)からも土器の出土が見られる。中期の代表的な遺跡としては、中期中葉の見眼遺跡(17)、向吹張遺跡、中期中葉から後葉にかけての旭久保Ｃ遺跡(18)、中期後葉の陣場遺跡が挙げられる。このうち見眼遺跡Ｊ－１号竪穴住居跡からは勝坂式と「焼町土器」、向吹張遺跡Ｊ－８Ａ号竪穴住居跡からは「焼町土器」と「三原田型深鉢」、加曾利ＥⅠ式並行の土器等が共伴関係で出土し、赤城山南麓域の土器組成を考える上で貴重な資料といえよう。旭久保Ｃ遺跡も土坑から「焼町土器」と勝坂式の良好な共伴関係が得られている。陣場・庄司原遺跡群からは加曾利Ｅ式期の集落が検出されている。後期の代表的な遺跡として称名寺式期の敷石住居跡が検出された陣場遺跡が挙げられる。

【弥生時代】

田中田遺跡から中期前半、後期後半の土器片が検出されたのみであり、集落址は未検出である。

【古墳時代】

『富士見村誌』では約90基に及ぶ古墳の存在が報告されているが、現在では耕作等により削平されたものが多い。古墳は白川沿いの大字時沢、大字小沢、前橋市に接する大字原之郷、大字横室、渋川市北橘町に接する大字米野、大字山口に多く分布している。確認された古墳のうち、陣場・庄司原遺跡群において古墳時代前期に帰属すると思われる方形周溝墓５基が検出された。九十九山古墳(19)は全長約60mを測り、赤城南麓域でも上位に入る大きさの前方後円墳である。石室は全長約8.50mの自然石乱石積の無袖型横穴式石室であり、赤城山南麓域における横穴式石室導入期の古墳である。また、陣場・庄司原遺跡群の上庄司原４号墳の石室は截石切組積の両袖型横穴式石室であり、石材には水磨きや朱線が施されているのが確認されている。上庄司原２号墳は榛名山二ツ岳噴出の角閃石安山岩を用いた削石互目積の両袖型横穴式石室である。石室構築後、殆ど時間をおかずに左壁が崩れ、天井石が崩落したためか未盗掘であり、子持瑳や馬具、直刀など良好な一括資料が検出されている。

集落としては、田中田遺跡が挙げられ、前期から後期までほぼ間断なく継続する大きな集落と推測される。

大字原之郷に所在する旭久保遺跡（20）は中期から後期まで竪穴住居跡が検出されているが、後期になると飛躍的に住居数が増加する。また、坂上遺跡からは牧の可能性がある方形区画遺構が検出されており、注目を有する。

【奈良・平安時代】

古墳時代後期からの遺跡数増加がさらに加速し、遺跡数は飛躍的に増加する。若干古墳時代と異なり、縄文時代と同様に裾野部の台地上に立地する傾向が見受けられる。多くの遺跡が調査されているが、旭久保遺跡、陣場・庄司原遺跡群から比較的まとまった集落が検出されている。このうち、陣場・庄司原遺跡群の竪穴住居跡からは鎌や紡錘車など豊富な鉄製品が出土している。また、当遺跡や東紺屋谷戸遺跡(21)、組之木原遺跡(22)が所在する時沢地内には濃密に遺物が散布している。さらに付近には溜井遺構内より「継」と墨書された土器が出土した時沢西高田遺跡(23)、大溝が検出された時沢宮東遺跡(24)などが確認されており、灌漑施設の導入による水田耕作の進出が窺われる。また、東方約2.5kmに所在する芳賀団地遺跡群(25)で、大規模な集落跡が検出されている。

第３章　調査の方法と基本層序

第１節　調査の方法

発掘調査は、まず重機を使用して表土除去を行ない、その後ジョレンかけにより遺構検出・プランの確認につとめた。その後、範囲確認された遺構の周辺に日本測地系IX系に準拠した５ｍ×５ｍのグリッド設定し、測量に際しての基準とした。なお東西をＸ、南北をＹとし、グリッド名は南東杭の名称を使用した。また、ベンチマークの標高は145.400ｍである。

住居跡は基本的に土層観察用のベルトを十字に残し、床面・壁面の精査を行なった。土坑・柱穴の大半は検出した平面のほぼ中央で半裁し、簡易な土層観察後に全掘した。遺物は床面近くのもの、残りのよいものを優先して図面と写真で出土状況・出土位置を記録した後に取り上げた。

各遺構の土層断面図は基本的に１/20で作成した。遺構平面図•遺物分布図は１/20を基本として作成した。遺跡の全体図は１/100で作図した。

遺構・遺物出土状況の記録写真は35㎜の白黒・カラースライドの２種類のフィルムを用いて、調査の進捗に併せて随時撮影した。

第２節　遺構・遺物の概要

本遺跡からは７世紀代の竪穴住居跡と９世紀から10世紀にかけての竪穴住居跡が確認され、土師器、須恵器、羽釜などが出土した。また、調査区中央付近には谷地状の窪みが確認された。

第３節　基本層序

基本層序は、Ｘ５Ｙ３グリッドの調査区壁を基に作成した。本遺跡の基本層序を第３図に示す。

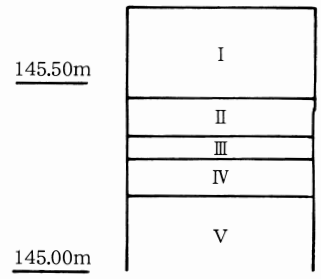
Ｉ層　褐色土　表土層。

II層　灰褐色砂質土　小礫、白色粒を微量含む。
締りなく粘性もなし。

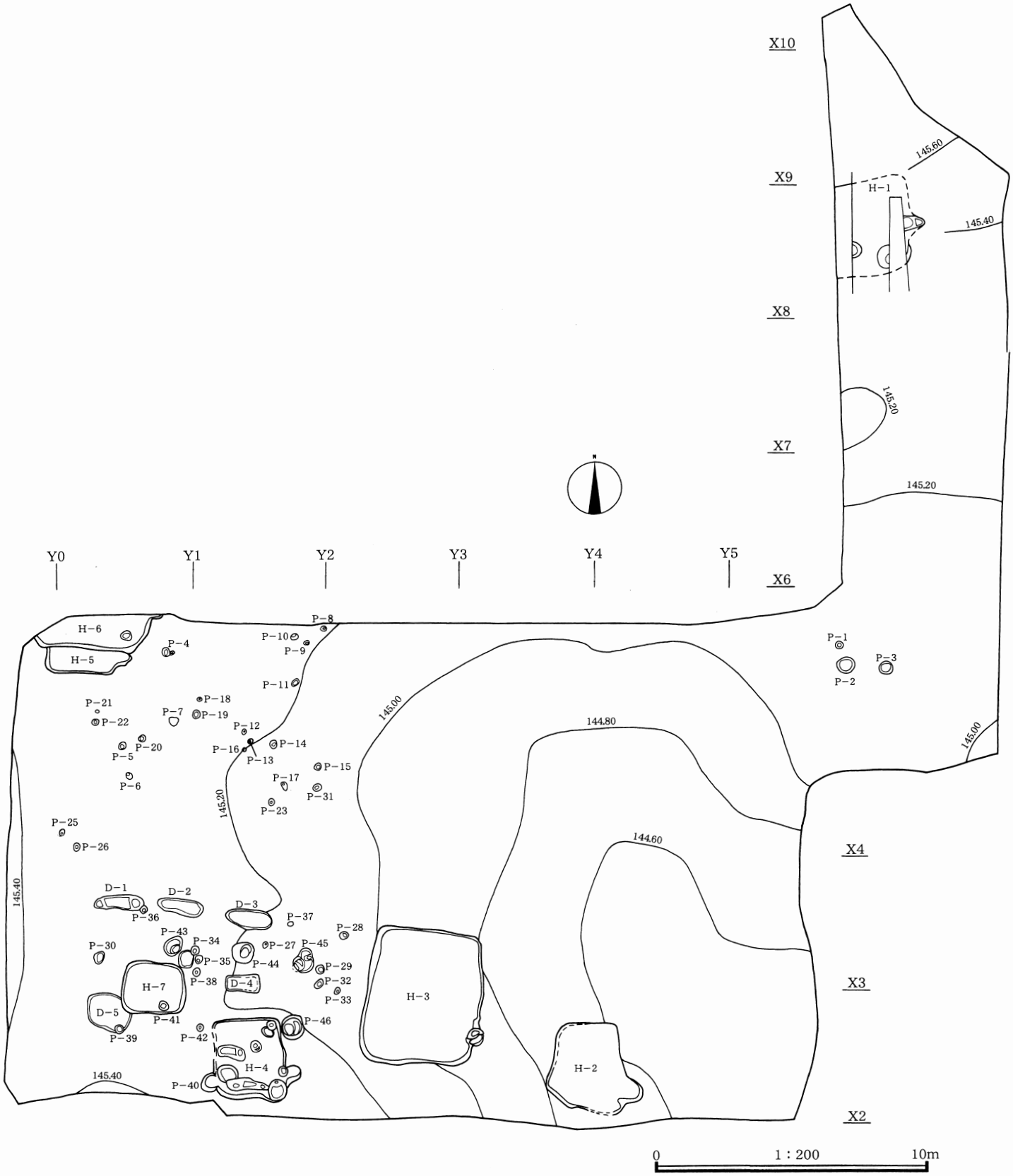
III層　暗褐色土　Hr—Fp（φ２㎜～５㎜）を含む。
締りなく粘性もなし。

IV層　黒褐色土　白黄色軽石（φ１㎜～３㎜）を微量含む。
締りやあり、粘性ややあり。

Ｖ層　黄褐色土　白色軽石（φ１㎜）を極微量含む。
締り、粘性ともにある。



第３図　時沢西萩林遺跡基本層序


X10
X9
X8
X7
X6
X4
X3
X2
Y0
Y1
Y2
Y3
Y4
Y5
H-1
H-2
H-3
H-4
H-5
H-6
H-7
D-1
D-2
D-3
D-4
D-5
145.60
145.40
145.20
145.00
144.80
144.60
0
1：200
10m

第４図　調査区全体図

第４章　検出された遺構と遺物

(1)　竪穴住居

１号竪穴住居跡

【位置】調査区北、Ｘ８Ｙ６グリッドからＸ８Ｙ７グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】調査区の関係から、東側の範囲を調査した。平面形状は方形を呈すると考えられ、調査範囲で東西2.1m、南北3.5mを測る。本住居跡は黒褐色土中に構築され、Hr―Fpの混じる黒褐色土を覆土とする。

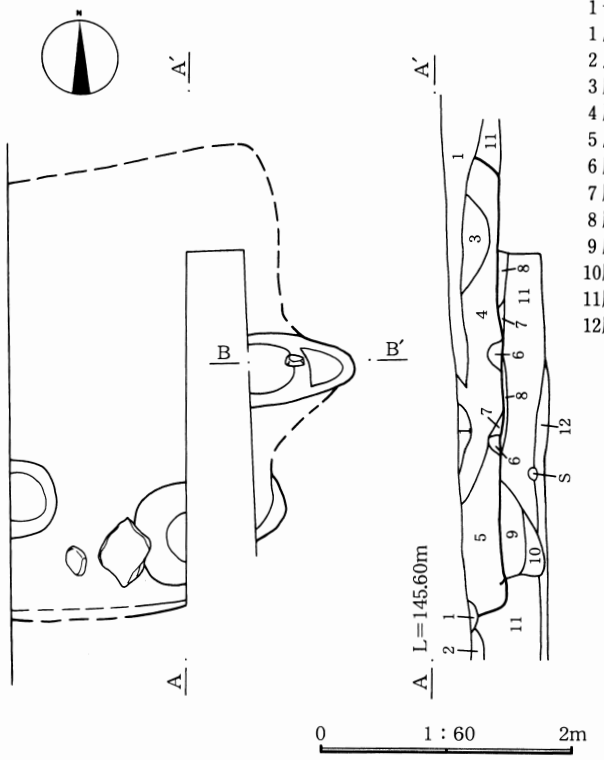
本住居跡の周辺は攪乱が及んでおり、平面的に明確な住居範囲は確認できないが、遺物の出土が密であった。そのため、東西南北にトレンチを設定し遺構の有無を確認したところ硬化面と竈が検出され、竪穴住居と認識し調査を進めた。しかし、住居構築土と住居覆土は似通っており、明確な壁は検出されず硬化の範囲を住居範囲と判断した。

【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは最大23cmを測る。全体的に床面は焼土粒を含み、硬く締まっている。竈前面は若干低くなり一段と硬く締まっている。床面中央付近から竈前面にかけて貼り床が施されている。壁周溝は確認されなかった。南東隅に長径80cm、深さ31cmを測る貯蔵穴が付設され貯蔵穴脇に偏平な礫が出土している。

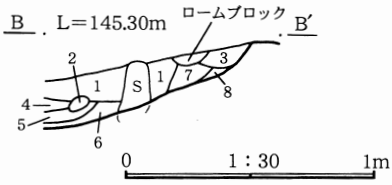
【竈】東壁の中央付近に付設する。竈の主軸は住居主軸と違え、やや北東を向く。燃焼部は壁外に位置しており、焚口には支柱石が検出されている。煙道は壁外に突出し、比較的緩やかに立ち上がる。袖は粘質土で構築されている。

【出土遺物】竈前面より土師器長胴甕、南東隅の貯蔵穴内より須恵器椀が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は９世紀中葉に比定できる。

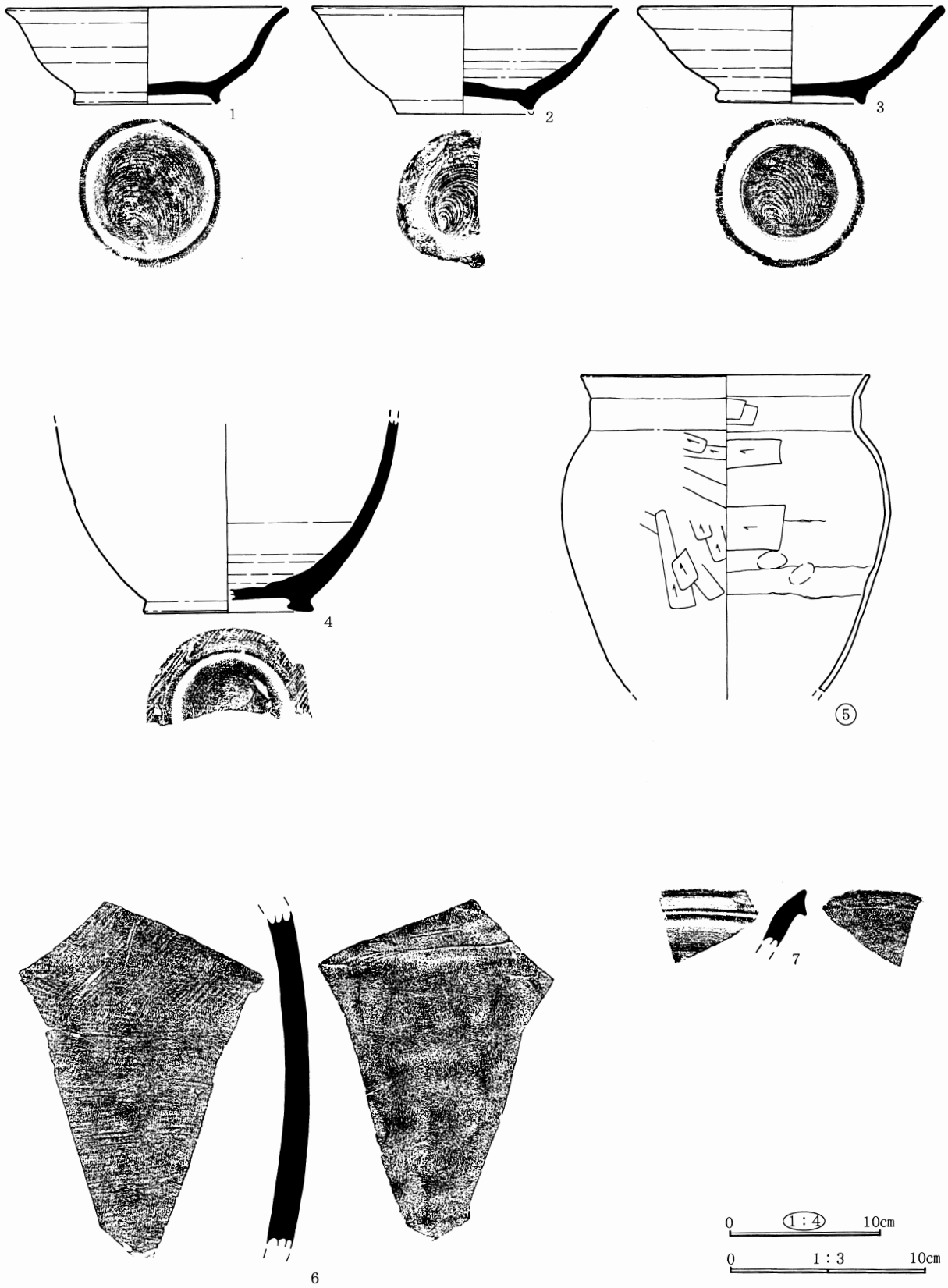


１号竪穴住居セクション
１層　灰色硬質土　攪乱層
２層　黒色土　Hr―Fpを強く含む。
３層　にぶい褐色土　白色軽石を多く含む。
４層　黒褐色土　下層で焼土粒、Hr―Fp、炭化物を含む。
５層　黒色土　白色軽石を若干含む。
６層　にぶい黄褐色土　焼土ブロック。灰が若干入る。竈の両袖。
７層　青灰層　灰層。
８層　にぶい赤褐色土　焼土粒が多く入る。
９層　黒褐色土　Hr―Fp、焼土ブロックが入る。
10層　黒褐色土　ロームブロックが入る。
11層　黒色土　粘性極めて強い。
12層　にぶい褐色土　小礫が多く混じる。



１号竪穴住居跡竈セクション
１層　黄赤褐色土　ローム細粒、焼土粒、炭化材が入る。
２層　焼土ブロック
３層　赤褐色土　赤褐色ブロック、焼土ブロックが入る。
４層　青灰層　灰層。下部に焼土粒が入る。
５層　青灰層　灰層。
６層　褐色土　焼土粒入る。
７層　黄褐色土　焼土粒入る。
８層　黒色土

第５図　１号竪穴住居跡



第6図　1号竪穴住居跡出土遺物

2号竪穴住居跡

【位置】調査区南、Ｘ２Ｙ４グリッドからＸ２Ｙ５グリッドにかけて位置する。

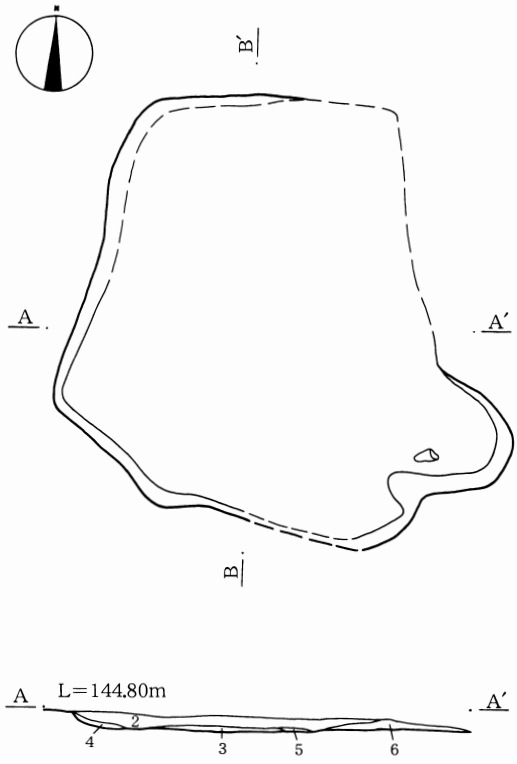
【形状・規模】本住居跡周辺は湧水が顕著であり、また、周辺に耕作による攪乱が及んでいるため平面的な住居範囲は明確にできなかった。また、１号竪穴住居跡と同様に住居構築土と住居覆土に差異は看取できない状況であった。そこで、１号竪穴住居跡と同様に東西南北にトレンチを設定し、床面及び壁面の確認調査を行なった。しかしながら、床面も部分的に脆弱なところが見受けられ、平面形態は判然としなかった。現状で東西2.6m、南北3.3mを測り、おそらく横長の方形を呈するものと思われる。

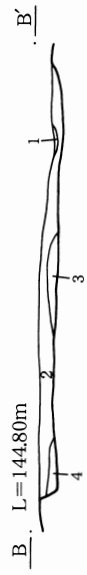
【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な西南で12cmを測る。竈前面部は硬く締まっているが、他の部分は耕作による攪乱が激しく及んでいるため判然としない。精査を続けたが、柱穴・貯蔵穴ともに検出されなかった。

【竈】残存状況は極めて悪いが、東壁南寄りの付設と思われる。燃焼部手前に支柱石が倒れた状態で出土した。煙道は壁外に突出し、壁高が低いせいか緩やかな立ち上がりを示す。前述したように、耕作による攪乱が激しいため、袖は一方のみが検出された。

【出土遺物】竈前面より須恵器椀、灰釉陶器が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は９世紀後半と思われる。

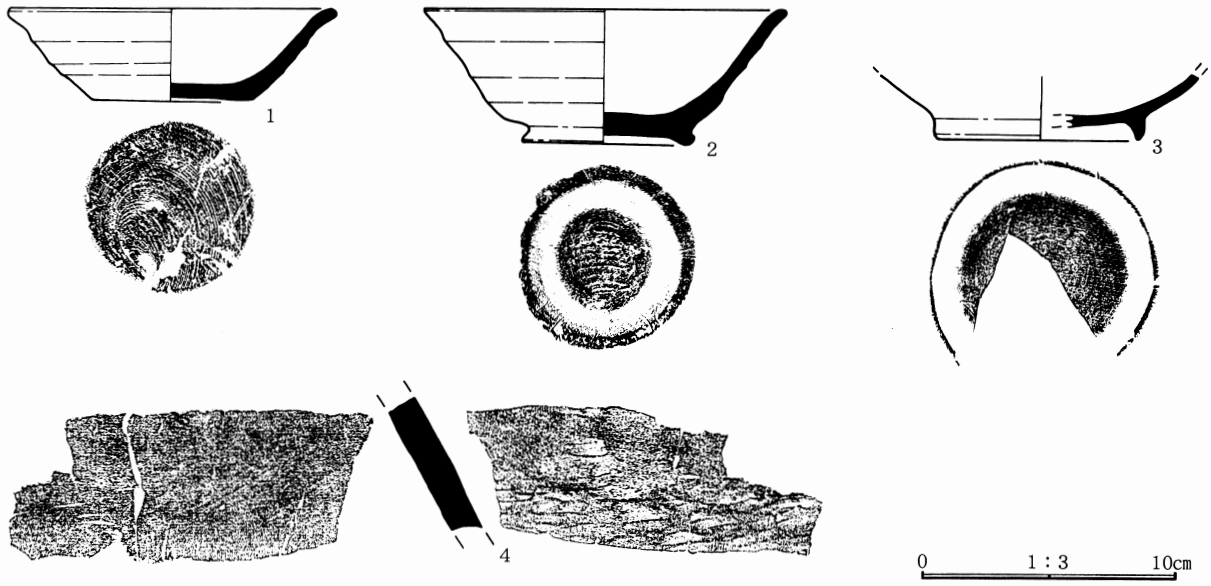




２号竪穴住居跡セクション
１層　赤褐色土　焼土ブロック主体層
２層　灰褐色土　As－Ｃ軽石、焼土粒若干入る。
３層　黒褐色土　As－Ｃ軽石、焼土粒入る。
４層　灰褐色土
５層　にぶい黄褐色土　焼土ブロック主体層。
６層　灰褐色土　Hr－Fp軽石を含む。

0　1：60　2m

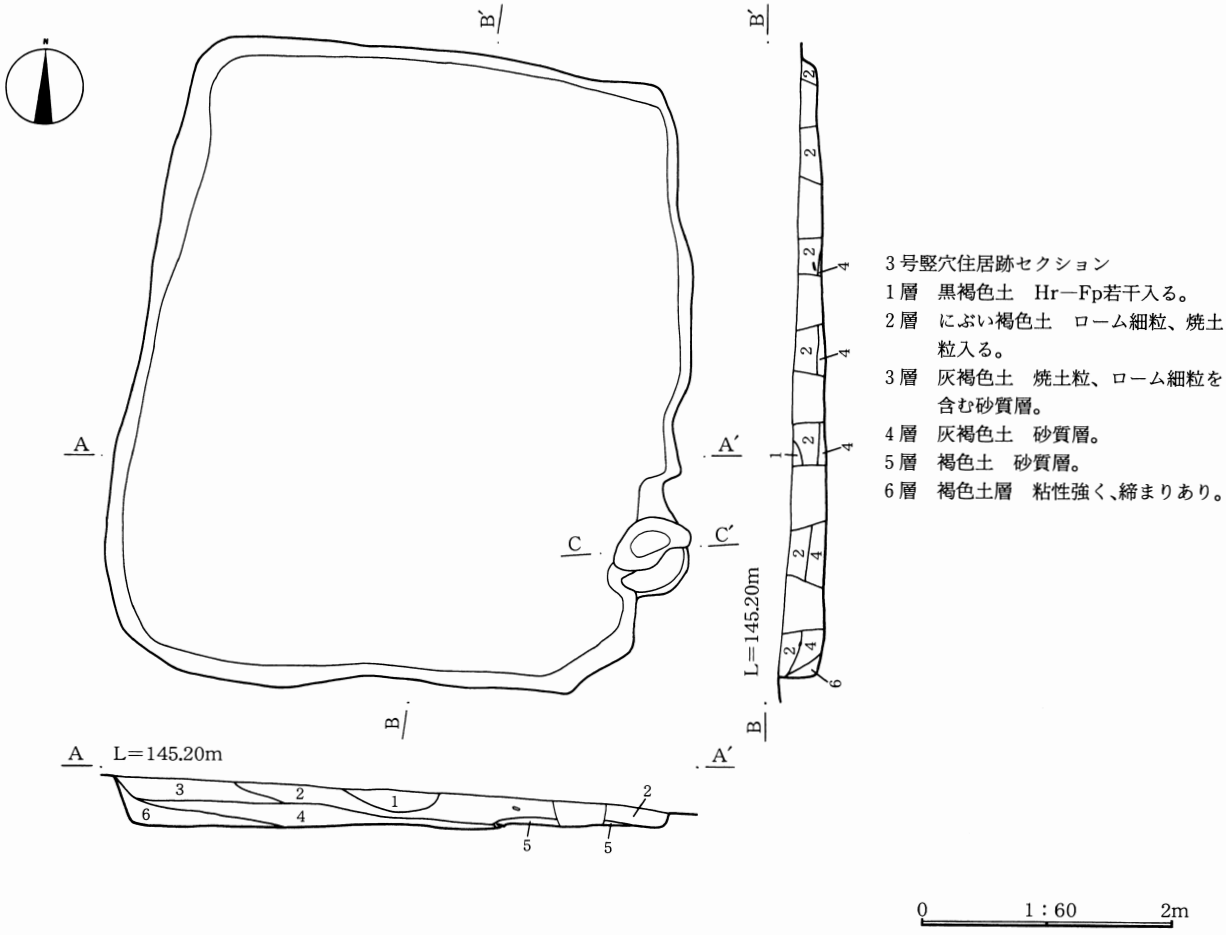
第７図　２号竪穴住居跡



第８図　２号竪穴住居跡出土遺物

３号竪穴住居跡

【位置】調査区ほぼ中央、Ｘ２Ｙ３グリッドからＸ３Ｙ３グリッドにかけて位置する。



第９図　３号竪穴住居跡

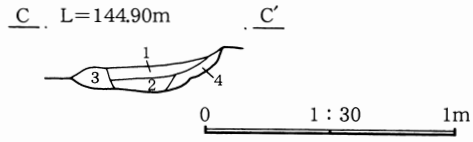
【形状・規模】本調査区で最大の住居跡であり、平面形態は隅丸方形を呈し、東西4.3m、南北5.0m、床面積18m²を測る。平面形態の詳細を脅かすほどではないものの、本住居跡も耕作に伴う攪乱が激しく及んでいる。

【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な南西約34cm下で床面となり、緩やかに立ち上がる。床面は竈前のみ硬化が確認された。その他は部分的に硬く締まるのみであり、比較的硬化面は少なかった。床面には若干であるが焼土粒の出土を認めるものの、明確な範囲として捉えられなかった。柱穴、貯蔵穴共に精査を行なったが、検出されなかった。

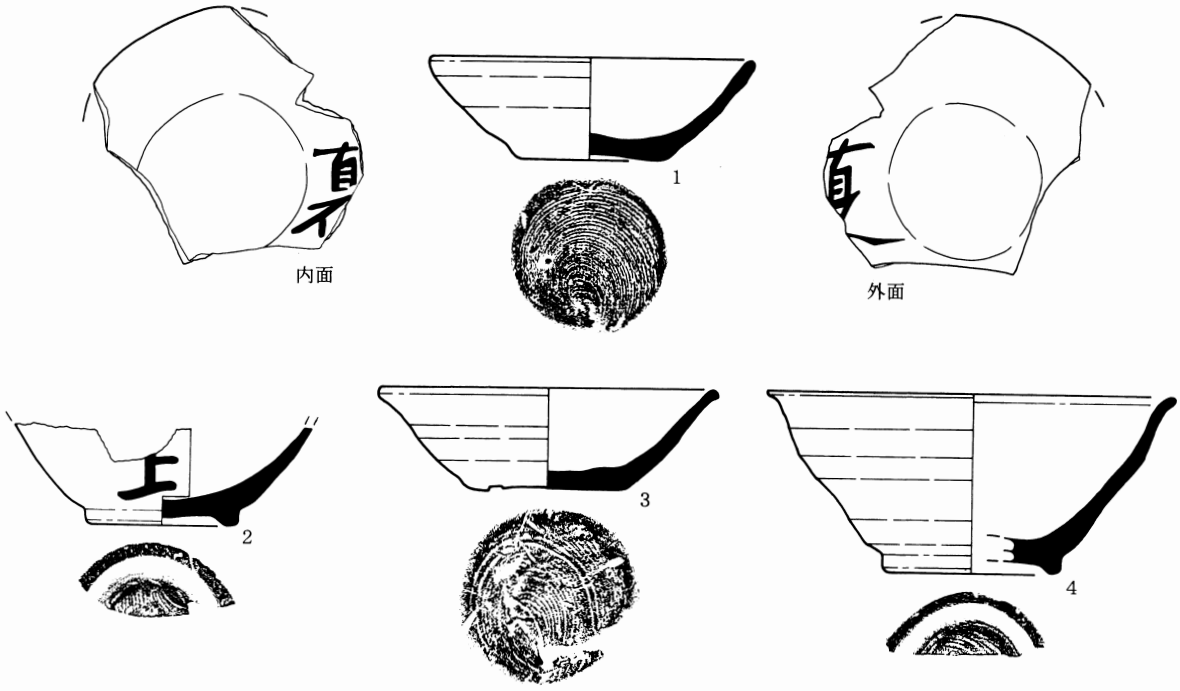
【竈】東壁の南寄りに付設されている。煙道は若干であるが壁外に出ており、遺存状況が悪いためか、緩やかに立ち上がる。また、攪乱が激しいため竈の袖は一方のみが検出された。

【出土遺物】南西壁よりから墨書土器が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は９世紀代に帰属すると思われる。



３号竪穴住居跡竈セクション
１層　赤褐色土　焼土ブロック主体層。
２層　名黄褐色土　ローム細粒入る。
３層　にぶい赤褐色土　灰層を含む。
４層　にぶい黄褐色土　焼土細粒入る。



第10図　３号竪穴住居跡竈断面図及び出土遺物

４号竪穴住居跡

【位置】調査区南、Ｘ２Ｙ２グリッドに位置する。

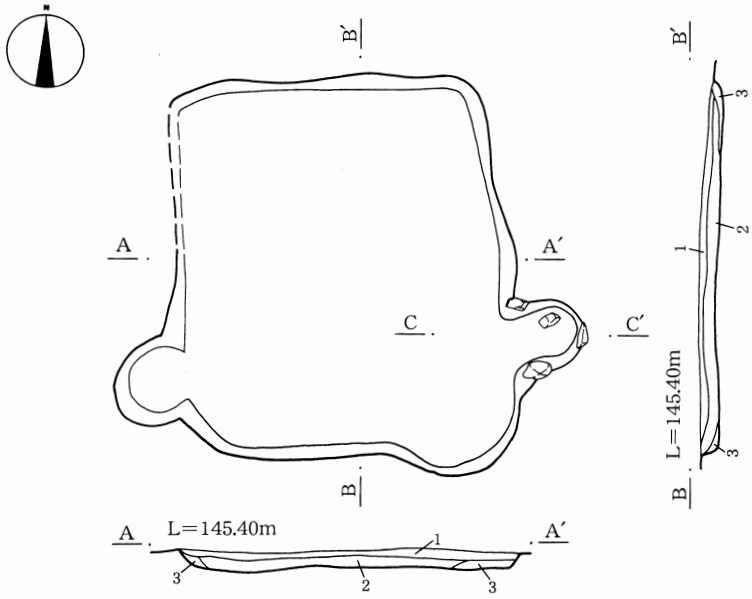
【形状・規模】平面形態は整った方形を呈し、東西2.3m、南北2.9m、床面積７m²を測る。南西隅でＰ－40と重複するが、前後関係は明確に捉えられなかった。

【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な北西約12cm下で床面となり、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は竈前広範囲に硬化面が確認された。精査を行なったが、柱穴は確認できなかった。掘り方の調査時に南西隅で長径80cm、短径70cm、深さ29cmを測る貯蔵穴と思われる落ち込みが確認された。

【竈】東壁の南寄りに付設されている。煙道は若干であるが壁外に伸びており、住居主軸と竈主軸は若干異なり、竈主軸はやや北を向く。竈は緩やかに立ち上がり、煙道手前と思われる場所より、支柱石が検出された。また、煙道先端からも礫が確認された。竈の両袖は礫で補強されている。

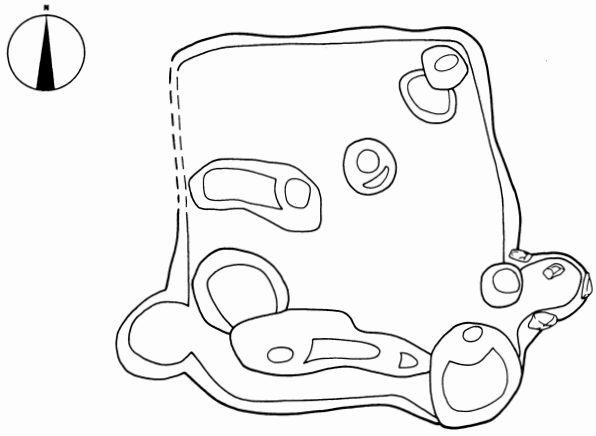
【出土遺物】竈寄りの南壁付近から、須恵器椀が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は9世紀代に帰属すると思われる。

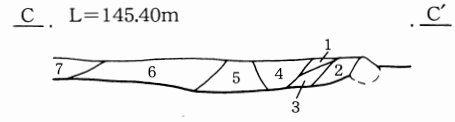


4号竪穴住居跡セクション
1層　灰褐色土　Hr—Fpを多く含み、硬くしまる。
2層　褐色土　Hr—Fpを若干含む。
3層　にぶい黄褐色土　ローム細粒主体層。

0　1：60　2m

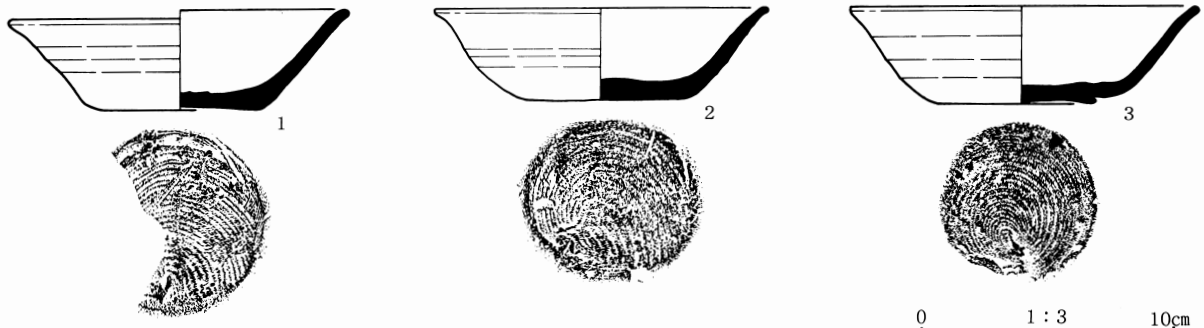


4号竪穴住居跡竈セクション
1層　黒褐色土　焼土細粒を多く含む。
2層　赤褐色土　焼土細粒、焼土ブロック主体層。
3層　暗赤褐色土　焼土粒、焼土ブロック主体層。
4層　黒褐色土　Hr—Fpを多く含み、焼土細粒を含む。
5層　暗褐色土　Hr—Fpを多く含む。下層に焼土細粒を含む。
6層　褐色土　焼土細粒を含む。
7層　褐色土　Hr—Fpを若干含む。



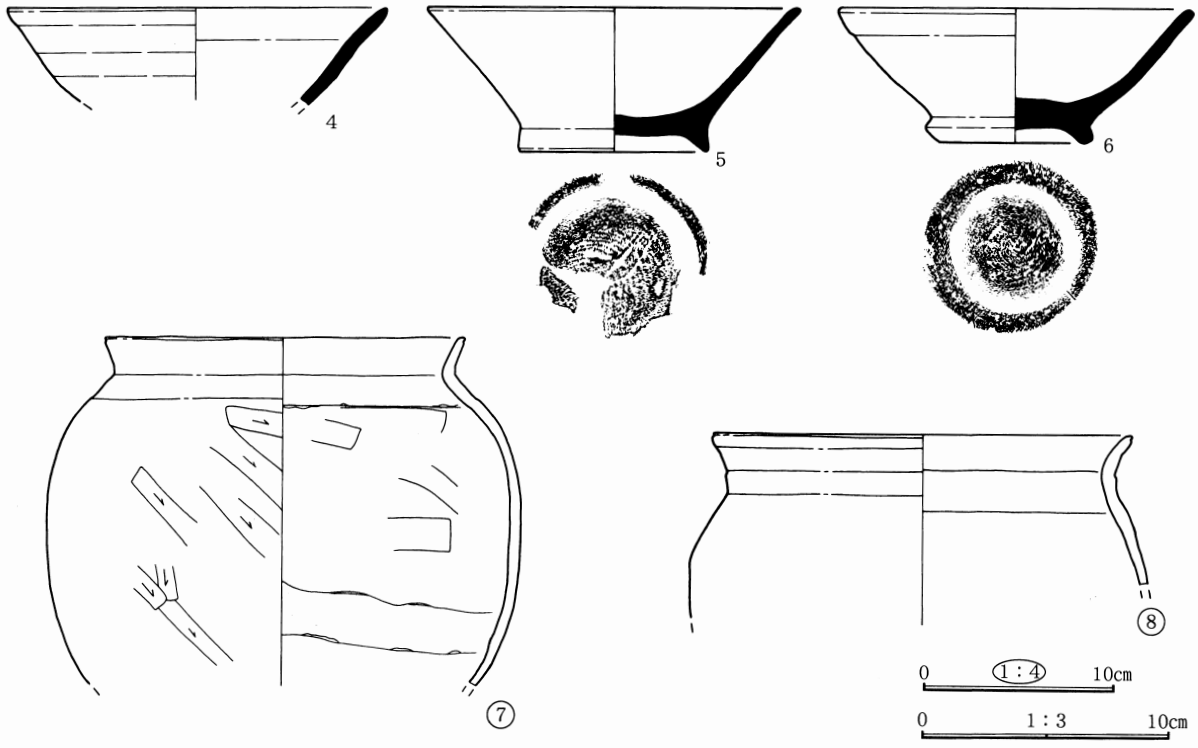
0　1：30　1m

4号竪穴住居跡堀り方



0　1：3　10cm

第11図　4号竪穴住居跡及び出土遺物

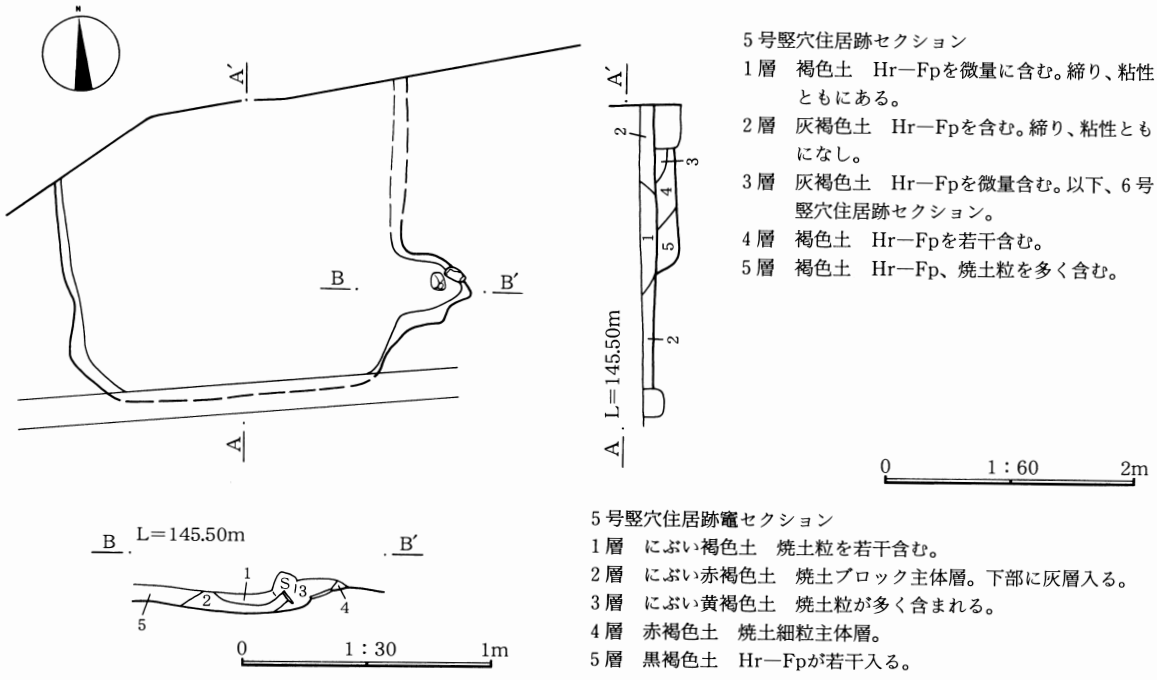


第12図　4号竪穴住居跡出土遺物

5号竪穴住居跡

【位置】調査区北方、X5Y0グリッドからX5Y1グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】調査区の関係から、南側のみを調査した。平面形態は長方形を呈すると推測され、調査した範囲では東西2.6m、南北2.2mを測る。6号竪穴住居跡と重複するが、本住居跡のほうが新しい。



5号竪穴住居跡セクション
1層　褐色土　Hr—Fpを微量に含む。締り、粘性ともにある。
2層　灰褐色土　Hr—Fpを含む。締り、粘性ともになし。
3層　灰褐色土　Hr—Fpを微量含む。以下、6号竪穴住居跡セクション。
4層　褐色土　Hr—Fpを若干含む。
5層　褐色土　Hr—Fp、焼土粒を多く含む。

5号竪穴住居跡竈セクション
1層　にぶい褐色土　焼土粒を若干含む。
2層　にぶい赤褐色土　焼土ブロック主体層。下部に灰層入る。
3層　にぶい黄褐色土　焼土粒が多く含まれる。
4層　赤褐色土　焼土細粒主体層。
5層　黒褐色土　Hr—Fpが若干入る。

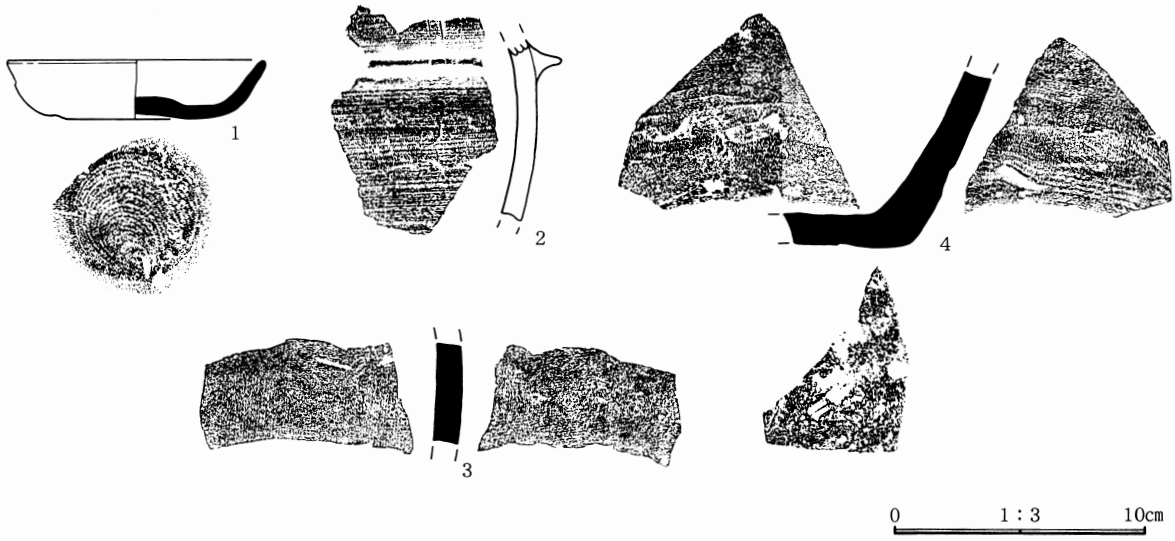
第13図　5号竪穴住居跡

【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な南西約13cm下で床面となり、壁面は緩やかに立ち上がる。竈前のみ硬化面が確認されるが、その他は比較的軟弱である。特に西側の床面は極めて軟弱である。精査を行なったが、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

【竈】東壁の南寄りに付設されている。煙道は壁外に伸びており、住居主軸と竈主軸はほぼ同じである。竈は緩やかに立ち上がり、煙道手前と思われる場所より支柱石が検出された。また、煙道の先端付近に礫が確認された。

【出土遺物】竈前面から羽釜が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は10世紀に帰属すると思われる。

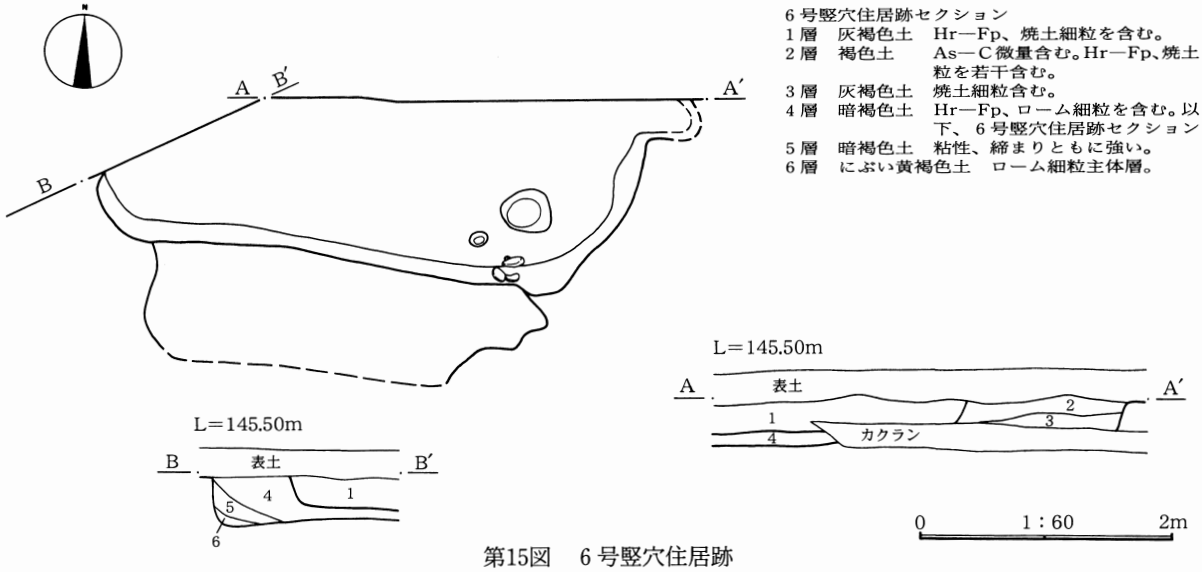


第14図　5号竪穴住居跡出土遺物

6号竪穴住居跡

【位置】調査区北方、X5Y0グリッドからX5Y1グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】調査区の関係から、南側のみを調査した。調査した範囲では東西4.0m、南北1.3mを測る。5号竪穴住居跡と重複するが、本住居跡のほうが古い。



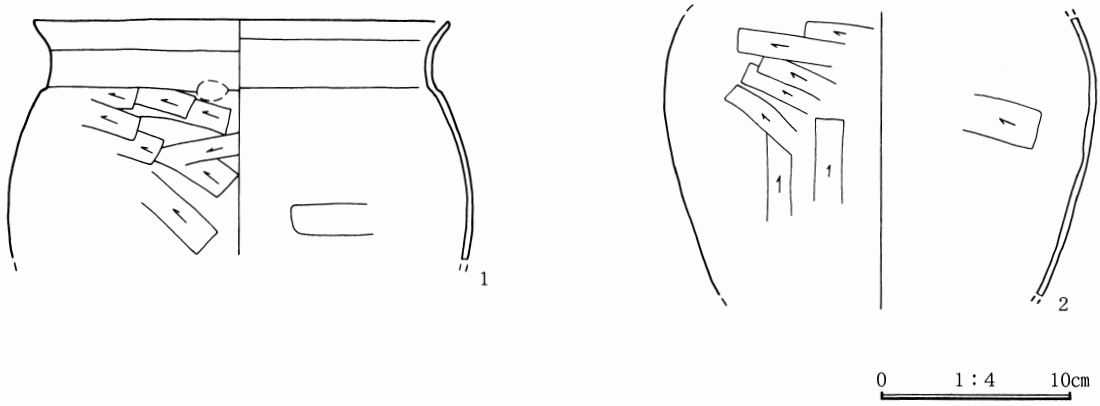
第15図　6号竪穴住居跡

【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な南西隅約40cm下で床面となり、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は全体的に硬く締まっており、特に竈前は強く締まっている。精査を行なったところ、長径40cm、短径30cm、深さ18cmを測る貯蔵穴が南西の方角で検出されたが柱穴は確認されなかった。

【竈】東壁に付設されているが、小動物による攪乱が著しく煙道先端については不明瞭である。

【出土遺物】竈から長胴甕が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は７世紀代に帰属すると思われる。



第16図　６号竪穴住居跡出土遺物

７号竪穴住居跡

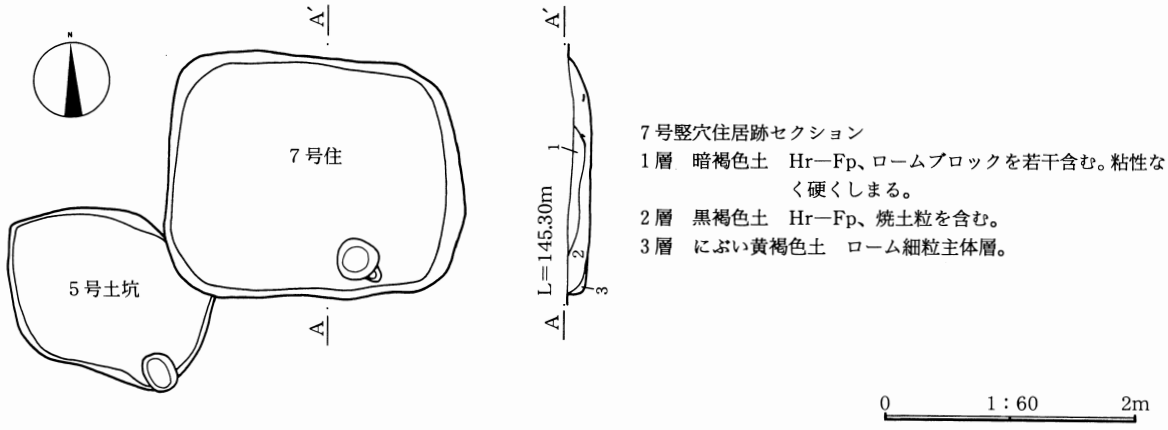
【位置】調査区西方、Ｘ２Ｙ１グリッドからＸ３Ｙ１グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】平面形態はやや正方形を呈し、東西2.3m、南北1.9m、床面積3.4m²を測る。住居跡ではない可能性があるが、調査時の判断で住居跡としたい。南西で５号土坑と重複するが本住居跡のほうが古い。また、内部でＰ―41と重複するが、前後関係は明確に把握できなかった。

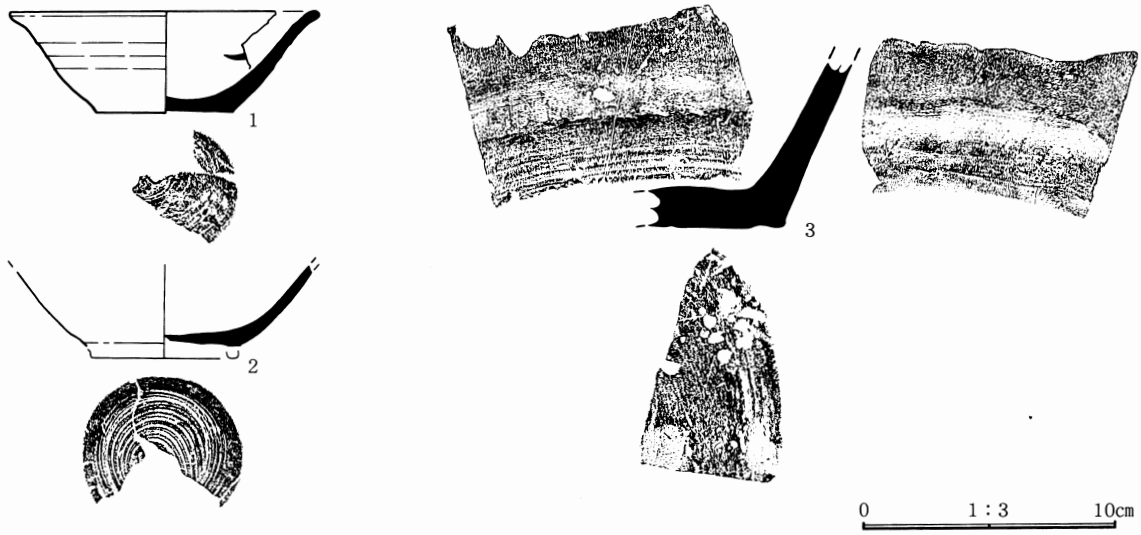
【床面・柱穴・貯蔵穴】深さは遺存度の良好な北西隅約20cm下で床面となり、壁面は緩やかに立ち上がる。床面は全体的に軟弱であり、床面南西付近で炭化材、焼土粒が確認された。精査を行なったが、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

【出土遺物】竈から長胴甕が出土している。

【所見】出土遺物から、本住居跡は９世紀代に帰属すると思われる。



第17図　７号竪穴住居跡及び５号土坑



第18図　７号住居跡出土遺物

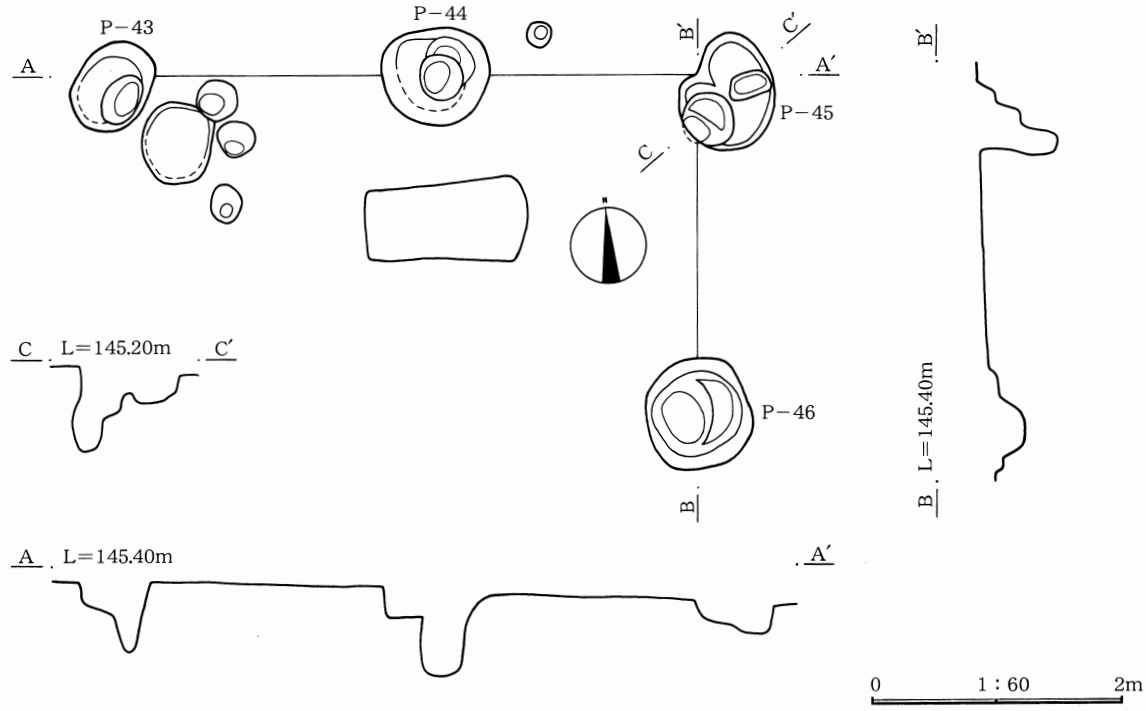
(2)　掘立柱建物跡

１号堀立柱建物跡

【位置】調査区西方、Ｘ３Ｙ１グリッドからＸ３Ｙ２グリッドにかけて位置する。

【形状・規模】南辺では明確に柱穴が確認されなかったが、東西２間×南北１間と思われる。規模は柱穴の芯々で東西4.7m、南北2.5mを測る。柱穴の平面形状は円形である。

【所見】出土遺物がなく、また、覆土からも積極的に時期を把握する物質はなかったため、所属時期は不明である。



第19図　１号堀立柱建物跡

(3) 土　坑

調査区からは6基の土坑が確認された。4号土坑からは遺物の出土が確認されたが、その他の土坑からは遺物の出土は確認されなかった。

1号土坑

【位置】X3Y1グリッドに位置する。

【形態】平面形態は長楕円形を呈し、長径1.7m、短径0.55m、深さ49cmを測る。

2号土坑

【位置】X3Y1グリッドに位置する。

【形態】平面形態は長楕円形を呈し、長径1.65m、短径0.6m、深さ74cmを測る。

3号土坑

【位置】X3Y2グリッドに位置する。

【形態】平面形態は長楕円形を呈し、長径1.75m、短径0.7m、深さ62cmを測る。

4号土坑

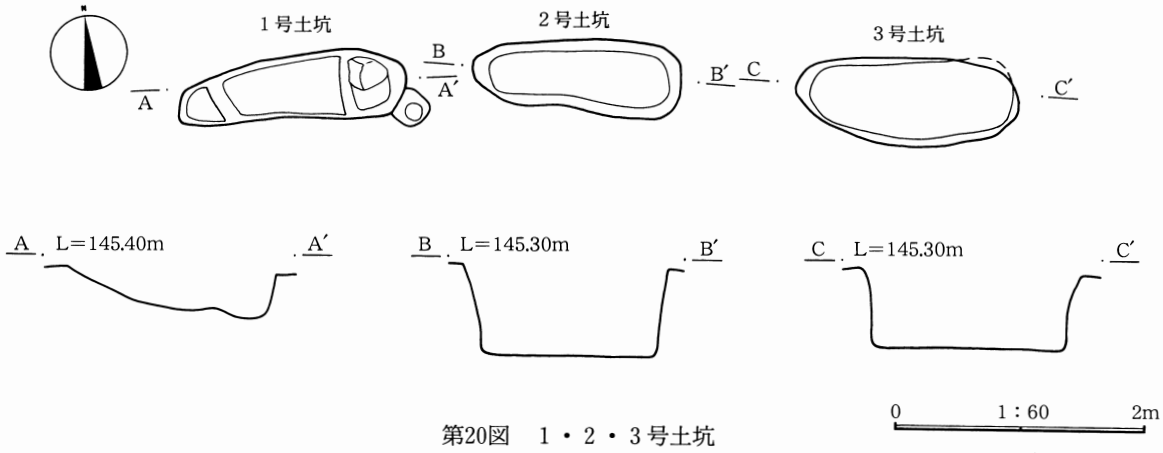
【位置】X3Y2グリッドに位置する

【形態】平面形態は方形を呈し、長径1.3m、短径0.7m、深さ30cmを測る。

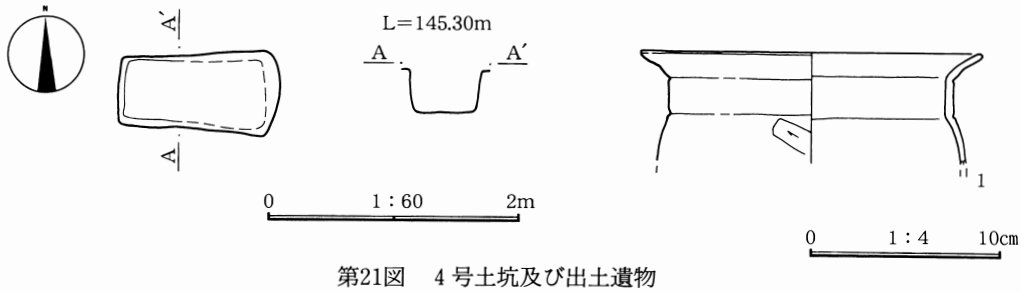
5号土坑

【位置】X2Y1グリッドに位置する。

【形態】平面形態は円形を呈し、長径1.8m、短径1.3m、深さ6cmを測る。7号竪穴住居跡とP—39と重複する。



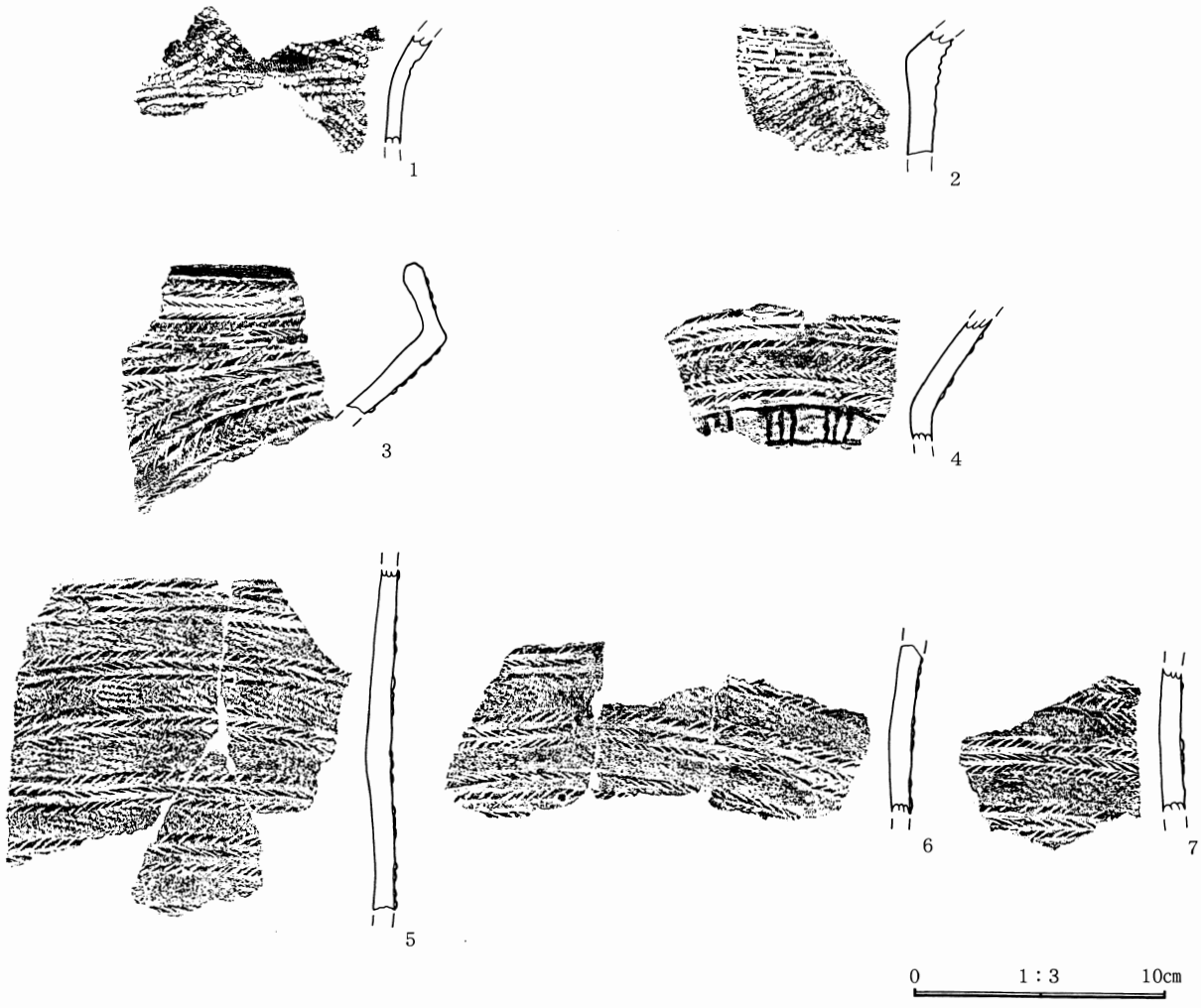
第20図　1・2・3号土坑



第21図　4号土坑及び出土遺物

(4)　遺構外出土遺物

調査区Ｘ５Ｙ３グリッドを中心として、３～７の諸磯ｂ式土器が出土した。一定のまとまりをもって出土したが、明確な遺構は捉えられなかったため、ここで遺構外として扱いたい。１は有尾式の頸部片である。２は黒浜式の頸部片である。３～７は同一個体と思われる諸磯ｂ式である。



第22図　遺構外出土遺物

第5章　成 果 と 課 題

第1節　竪穴住居跡

発掘調査により7世紀に帰属する竪穴住居跡1軒、9世紀に帰属する竪穴住居跡5軒、10世紀に帰属する竪穴住居跡1軒が確認された。しかしながら、調査した大半の住居跡が調査区外であり、また、2号竪穴住居跡は耕作や湧水により、全体を把握できない状況であった。このような状況の中で、3号竪穴住居跡と4号竪穴住居跡は全体が把握できる遺構である。

4号竪穴住居跡は住居規模から見ると、9世紀代の竪穴住居跡としては典型的である。その一方で3号竪穴住居跡は床面積18m²を測り、9世紀代の竪穴住居跡としては比較的大型である。

本遺跡の北東に所在する時沢西高田遺跡、時沢宮東遺跡でも7世紀から9世紀にかけての集落が検出されている。両遺跡ともに、墨書土器が出土しており、本遺跡と同じ集落様相がうかがえる。また、時沢西高田遺跡からは、東西3間×南北2間で南側に庇を持つ掘立柱建物跡が検出されているなど注目する遺跡が存在している。

第2節　墨書土器

本遺跡の3号竪穴住居跡から内面に「真合」、外面に「真□」と記載された墨書土器（第10図1）と外面に「上」と記載された墨書土器（第10図2）の2点が検出された。ここでは第10図1の墨書土器について、考察を進めたい。

墨書を観察すると内面・外面ともに底部のやや上で径に沿うように記載されている。また、内面の記載場所と外面の記載場所は表裏一体であり、意識的に書かれているようである。そこで、判読不能の外面「真□」は「真合」と記載されていたと判断したい。

次に墨書の内容について検討したい。内・外面に書かれた「真合」「真□」のうち、「合」は「カウ」や「コウ」の意とされている。また、「真」の文字は和妙類聚抄に記載されている郷のうち、本遺跡より北西約7kmの渋川市北橘町真壁に存在していたと推測される真壁郷の頭文字であろうか。この点から、「真合」は真壁郷の意で書かれた可能性を指摘したい。同じく和妙類聚抄に記載された芳賀郷についても、前橋市二之宮洗橋遺跡より「芳郷」と記載された墨書土器が出土している。郷名の頭文字と郷を記載している点で、本遺跡出土の墨書土器と類似している。

本遺跡が所属する大字時沢は、未解明であるが和妙類聚集に記載されている時沢郷との関係が指摘されている地である。「真合」の文字を以て、真壁郷もしくは関係する時沢郷をこの地に比定するには早急であろうが、郷名が入った墨書土器が時沢で確認された事は考慮しなければならないであろう。

本遺跡周辺を見回しても、東西3間×南北2間の総柱建物で4面に庇を設ける12世紀代の掘立柱建物跡が確認された東紺屋谷戸遺跡をはじめとして、東西3間×南北2間で南側に庇を持つ掘立柱建物跡や「継」と書かれた墨書土器が9世紀代の溜井遺構から確認された時沢西高田遺跡など注目すべき遺跡が存在している。古代における時沢の地の重要性が垣間見られる。

【主な参考文献】

池邊彌　1970『和妙類聚郷名考證　増訂版』吉川弘文館

飯田陽一　1994『二之宮洗橋遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団

表１　時期不詳柱穴一覧

遺構番号	位置	平面形態	規模(m)	残存深度
P－1	X 5－Y 6	四角形	0.25×0.25	24cm
P－2	X 5－Y 6	円形	0.65×0.6	15cm
P－3	X 5－Y 7	円形	0.5 ×0.46	17cm
P－4	X 5－Y 1	楕円形	0.35×0.25	11cm
P－5	X 4－Y 1	円形	0.28×0.25	27cm
P－6	X 4－Y 1	楕円形	0.27×0.2	42cm
P－7	X 5－Y 1	隅丸三角形	0.35×0.31	47cm
P－8	X 5－Y 2	隅丸三角形	0.19×0.18	19cm
P－9	X 5－Y 2	円形	0.18×0.18	9 cm
P－10	X 5－Y 2	円形	0.26×0.21	22cm
P－11	X 5－Y 2	楕円形	0.31×0.21	10cm
P－12	X 4－Y 2	円形	0.14×0.14	21cm
P－13	X 4－Y 2	円形	0.2 ×0.18	22cm
P－14	X 4－Y 2	円形	0.25×0.25	11cm
P－15	X 4－Y 2	不整形	0.3 ×0.25	17cm
P－16	X 4－Y 2	円形	0.14×0.13	24cm
P－17	X 4－Y 2	楕円形	0.3 ×0.15	21cm
P－18	X 5－Y 2	円形	0.18×0.15	20cm
P－19	X 5－Y 2	楕円形	0.25×0.22	13cm
P－20	X 4－Y 1	四角形	0.27×0.24	10cm
P－21	X 5－Y 1	円形	0.15×0.13	
P－22	X 5－Y 1	円形	0.22×0.22	7 cm
P－23	X 4－Y 2	円形	0.23×0.21	29cm
P－24				
P－25	X 4－Y 1	楕円形	0.25×0.18	53cm
P－26	X 4－Y 1	楕円形	0.31×0.23	46cm
P－27	X 3－Y 2	円形	0.22×0.2	32cm
P－28	X 3－Y 3	円形	0.31×0.26	17cm
P－29	X 3－Y 2	円形	0.32×0.29	12cm
P－30	X 3－Y 1	楕円形	0.47×0.34	17cm
P－31	X 4－Y 2	円形	0.29×0.28	47cm
P－32	X 3－Y 2	楕円形	0.36×0.27	44cm
P－33	X 2－Y 3	楕円形	0.27×0.17	18cm
P－34	X 3－Y 2	円形	0.33×0.33	49cm
P－35	X 3－Y 2	円形	0.3 ×0.29	22cm
P－36	X 3－Y 1	四角形	0.26×0.25	34cm
P－37	X 3－Y 2	円形	0.18×0.17	46cm
P－38	X 3－Y 2	楕円形	0.3 ×0.25	14cm
P－39	X 2－Y 1	楕円形	0.33×0.25	22cm
P－40	X 2－Y 2	円形	0.7 ×0.65	16cm
P－41	X 2－Y 1	円形	0.34×0.31	13cm
P－42	X 2－Y 2	円形	0.27×0.25	55cm
P－43	X 3－Y 1	楕円形	0.55×0.75	58cm
P－44	X 3－Y 2	円形	0.85×0.80	71cm
P－45	X 3－Y 2	不整形	0.75×0.94	68cm
P－46	X 2－Y 2	円形	0.83×0.87	53cm

※ただし、P－24は整理作業段階で、植物痕と判断したため欠番とし、記載していない。

土器観察表

1号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 椀	口径 14.0 底径 7.0 器高 4.9	①長石、輝石 ②灰白色7.5Y7/2 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後に高台を添付する。 内面　轆轤成形。中央がやや窪む。	底部から口縁まで4/5残存。
2	須恵器 椀	口径 15.4 底径 7.0 器高 5.2	①輝石、長石、赤色粒子 ②灰白色5Y7/2 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後に高台を添付する。 内面　轆轤成形。成形痕が顕著。	底部から口縁まで4/5残存。
3	須恵器 椀	口径 15.2 底径 7.3 器高 5.0	①白色粒子 ②灰色N6/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後に高台を添付する。 内面　轆轤成形。中央がやや窪む。	口縁1/6欠。
4	須恵器 長頸壺	口径 — 底径 8.5 器高 (9.5)	①白色粒子 ②緑灰色10GY5/1 ③酸化焔	外面　ナデ成形。底部はヘラ起し後、高台を貼付し、丁寧なナデ。 内面　ナデ成形。中央部が著しく窪む。	底部から体部まで1/4残存。
5	土師器 甕	口径 19.5 底径 — 器高(21.4)	①長石、輝石、赤色粒子 ②明赤褐色5YR5/8 ③還元焔	外面　口縁部「コ」字状。口縁から頸部横ナデ。胴部ヘラ削り。 内面　横ナデ。指頭圧痕あり。	
6	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、小礫 ②灰色N4/ ③酸化焔	外面　平行タタキ。 内面　無文の当て具。丁寧なナデ。	体部破片。
7	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①白色粒、輝石 ②灰オリーブ色5Y6/2 ③酸化焔	外面　口縁部轆轤整形。口唇部は下方に伸びる。 内面　轆轤整形後、ナデ。	口縁部破片。

2号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径 13.0 底径 6.2 器高 3.6	①白色粒子、輝石 ②灰色N6/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後にヘラ押さえ。 内面　轆轤成形。中央部がやや盛り上がる。	底部から口縁部にかけて4/5残存。
2	須恵器 椀	口径 14.2 底径 6.8 器高 5.3	①白色粒子、赤色粒子、小礫　②灰色N6/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後に高台を粗く添付する。 内面　轆轤成形。	ほぼ完形。
3	灰釉陶器 椀	口径 — 底径 [8.0] 器高 (2.7)	①微細な白色粒子 ②灰白色2.5GY8/1 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部を調整後に高台を丁寧に添付する。 内面　轆轤成形。	底部から体部下位にかけて残存。
4	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 —	①輝石、小礫 ②灰白色7.5Y8/2 ③酸化焔	外面　タタキ後、ナデ調整。 内面　平行線の当て具痕。上面はナデ。	胴部破片。

3号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径[12.6] 底径　6.0 器高　4.0	①長石、輝石、赤色粒子 ②灰白色N7/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り未調整。 内面　轆轤成形。中央が盛り上がる。	内外面に「真合」、「真□」の文字。
2	須恵器 高台椀	口径　— 底径［6.0］ 器高　3.9	①輝石 ②灰白色N8/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り調整後に高台を貼付する。 内面　轆轤成形。	外面に「上」の文字。
3	須恵器 坏	口径[13.6] 底径　6.5 器高　4.0	①輝石、小礫 ②灰白色7.5Y7/1 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後にヘラ押さえ。 内面　轆轤成形。	底部から口縁部にかけて1/3残存。
4	須恵器 高台椀	口径[16.0] 底径［7.0］ 器高　7.1	①小礫 ②灰白色7.5Y8/1 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り調整後に高台を貼付する。整形痕が顕著。 内面　轆轤成形。	底部から口縁部にかけて1/6残存。

4号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径 13.3 底径　7.2 器高　4.0	①長石、小礫 ②灰色7.5Y5/1 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後にヘラ押さえ。歪みが観られる。 内面　轆轤成形。	底部から口縁部にかけて3/4残存。
2	須恵器 坏	口径 13.0 底径　6.2 器高　3.6	①輝石、小礫 ②灰色7.5Y5/1 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り未調整。 内面　轆轤成形。	口縁部、1部欠。
3	須恵器 坏	口径 13.6 底径　6.2 器高　3.8	①赤色粒子 ②浅黄色2.5Y7/4 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り後にヘラ押さえ。 内面　轆轤成形。	口縁部、1部欠。
4	須恵器 高台椀	口径 15.0 底径　— 器高（3.8）	①輝石、小礫 ②灰白色5Y7/2 ③酸化焔	外面　轆轤整形。 内面　轆轤成形。	体部から口縁部にかけて3/4残存。
5	須恵器 高台椀	口径 14.3 底径　7.4 器高　5.7	①小礫、輝石 ②灰白色7.5Y7/2 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部回転糸切り調整後に高台を粗く添付する。 内面　轆轤成形。	底部から口縁部にかけて2/3残存。
6	須恵器 高台椀	口径 14.0 底径　6.6 器高　5.3	①輝石、長石、赤色粒子 ②浅黄色5Y7/4 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部はヘラ起し後に高台を粗く添付する。 内面　轆轤成形。	底部から口縁部にかけて3/4残存。
7	土師器 甕	口径　[19] 底径　— 器高(18.4)	①輝石、長石 ②赤褐色5YR4/6 ③還元焔	外面　口縁部から頸部横ナデ。体部は斜位のヘラ削り。 内面　横方向のナデ。	体部中位から口縁部にかけて1/6残存。
8	土師器 甕	口径 22.0 底径　— 器高（9.7）	①長石、輝石、白色粒子 ②灰褐色7.5YR5/2 ③還元焔	外面　口縁部から頸部横ナデ。頸部付近に明瞭な横ナデ痕。体部は斜位のヘラ削り。 内面　横方向のナデ。	体部上位から口縁部にかけて1/5残存。

5号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径 10.1 底径 5.5 器高 2.3	①長石、石英 ②淡橙色7.5YR8/4 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り未調整。 内面　轆轤成形。中央がやや盛り上がる。	底部から口縁部にかけて2/3残存。
2	土師器 羽釜	口径　— 底径　— 器高　—	①長石、輝石 ②赤褐色2.5YR4/6 ③還元焔	鍔下よりやや内傾する。外面　鍔添付後に丁寧な横ナデ。 内面　横ナデ。	頸部付近の破片。
3	須恵器 甕	口径　— 底径　— 器高　—	①小礫、輝石 ②灰色N5/ ③酸化焔	外面　ナデ成形。体部ヘラナデ。底部はヘラ起し。 内面　ナデ成形。	底部から体部下位の破片。
4	須恵器 甕	口径　— 底径　— 器高　—	①長石、輝石、小礫 ②灰色N5/ ③酸化焔	外面　斜位のナデ 内面　無文の当て具痕。斜位のナデ。	体部破片。

6号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	土師器 甕	口径[22.0] 底径　— 器高(12.0)	①輝石、白色粒子 ②暗赤色10R3/6 ③還元焔	外面　口縁部から頸部にかけて横ナデ。体部は横位、斜位のヘラ削り。 内面　横ナデ、ヘラナデ。	口縁部から体部上位にかけて1/6残存。
2	土師器 甕	口径　— 底径　— 器高(14.0)	①輝石、長石 ②赤褐色2.5YR4/6 ③還元焔	外面　横位、斜位のヘラ削り。焼けた粘土が付着する。 内面　横位のナデ。	体部片。

7号竪穴住居跡出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径[12.0] 底径 [5.4] 器高 (4.0)	①長石、輝石 ②灰白色10Y8/ ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部は回転糸切り未調整。 内面　轆轤成形。	内面に墨書。
2	須恵器 高台椀	口径　— 底径　6.0 器高 (3.2)	①輝石、赤色粒子 ②赤橙色10R6/6 ③酸化焔	外面　轆轤整形。底部回転糸切り未調整。高台添付痕。 内面　轆轤成形。	底部から体部上位にかけて1/4残存。
3	須恵器 甕	口径　— 底径　— 器高 (6.4)	①白色粒子、輝石 ②灰色7.5Y5/1 ③酸化焔	外面　ナデ成形。体部下位にヘラナデ痕。底部はヘラ起し。 内面　横ナデ。	体部下位から底部にかけての破片。

4号土抗出土遺物　※（　）は現存値を、［　］は復元値を表す。数値の単位はcmである。

番号	器種	法量	①胎土②色調③焼成	整・成形の特徴	備考
1	土師器 甕	口径[18.0] 底径　— 器高 (6.1)	①輝石、白色粒子 ②赤褐色2.5YR4/6 ③還元焔	外面　口縁部「コ」字状。口縁から頸部横ナデ。胴部ヘラ削り。 内面　横ナデ。	口縁部から体部上位にかけての破片。

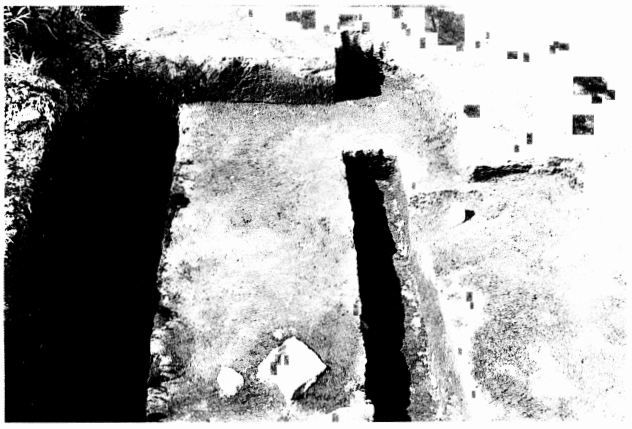
抄　　録

フリガナ	トキザワニシハギバヤシイセキ
書名	時沢西萩林遺跡
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ	
シリーズ番号	
編集者	福田貫之
編集機関	群馬県勢多郡富士見村教育委員会
所在地	群馬県勢多郡富士見村大字田島866－1
発行日	平成19年3月28日

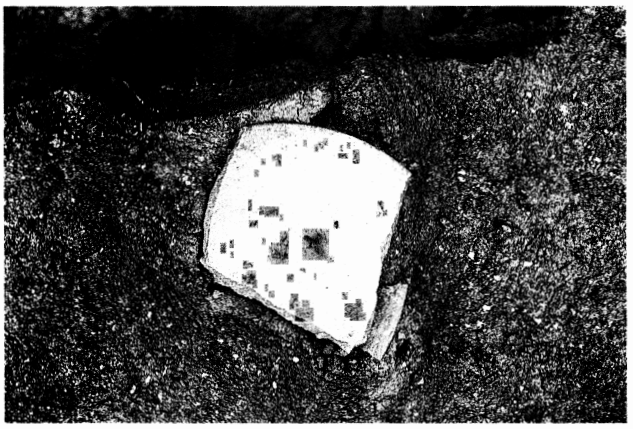
所収遺跡	所在地	コード		北緯(°′″)	東経(°′″)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
時沢西萩林遺跡	群馬県勢多郡 富士見村大字時沢	10303	137	36° 25′ 33″	139° 05′ 00″	20070710 ～ 20070811	780m²	宅地造成

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
時沢西萩林遺跡	集落	平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑・柱穴	縄文土器 土師器・須恵器 灰釉陶器	「真合」の墨書土器

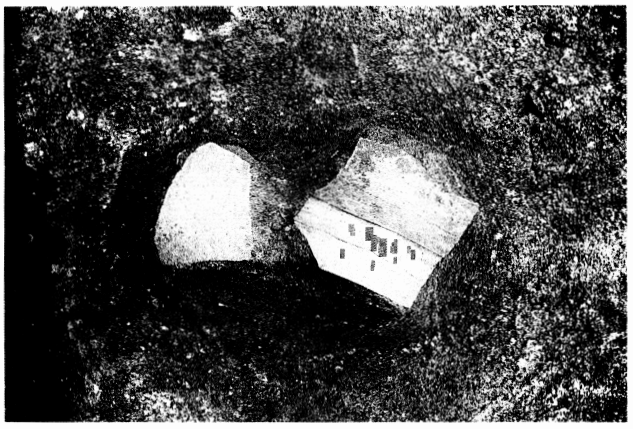
写 真 図 版



1号住居跡　全景



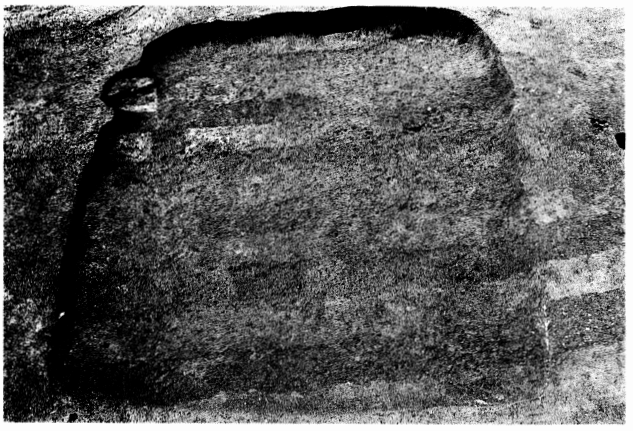
1号住居跡　遺物出土状況



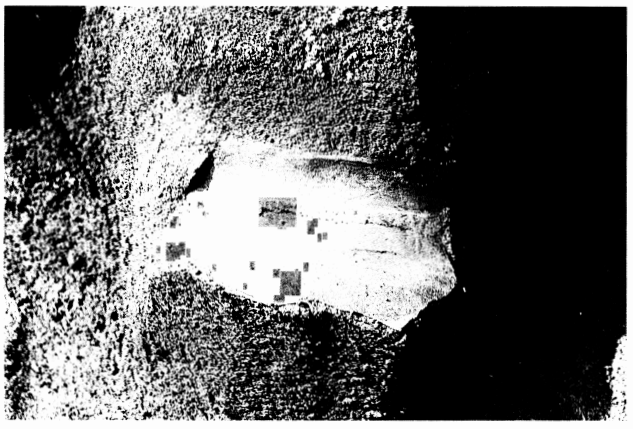
1号住居跡　遺物出土状況

1号住居跡　遺物出土状況

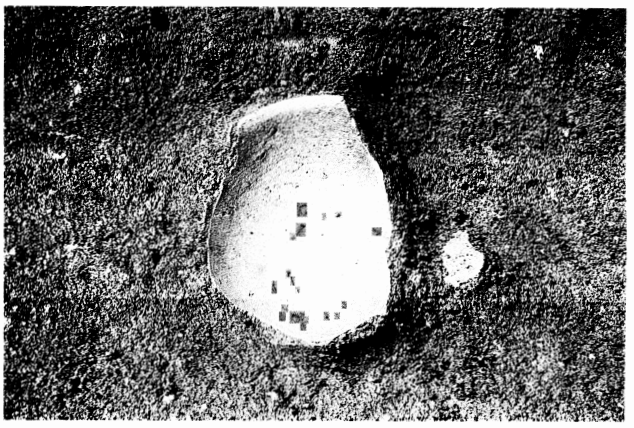
2号住居跡　全景



3号住居跡　全景

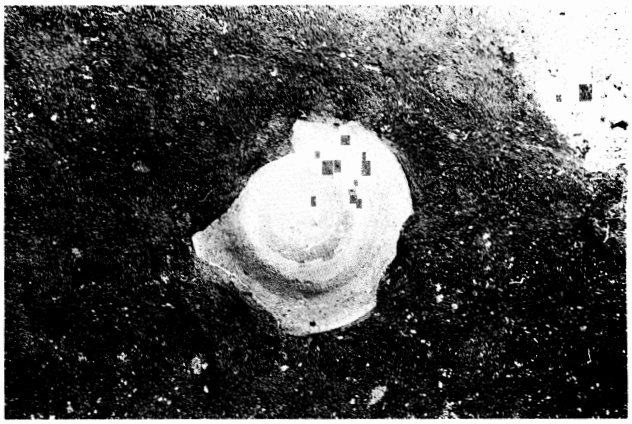


3号住居跡　遺物出土状況



3号住居跡　遺物出土状況

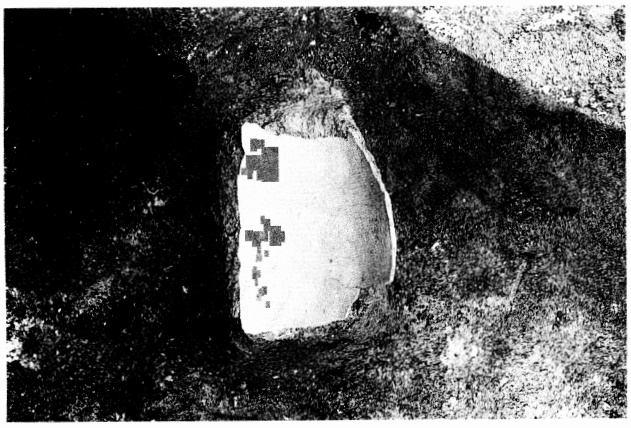
4号住居跡　全景



4号住居跡　遺物出土状況

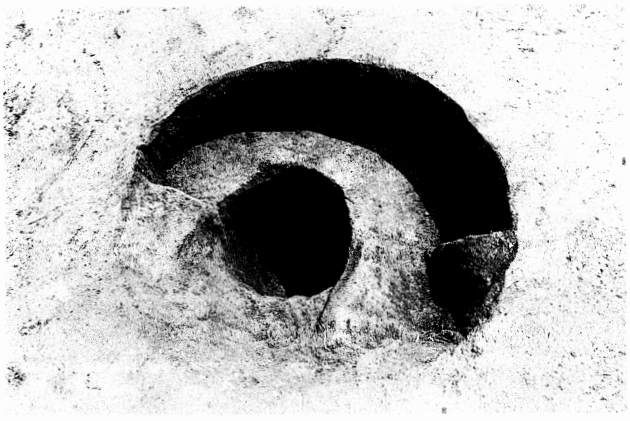
5号住居跡　全景

6号住居跡　全景



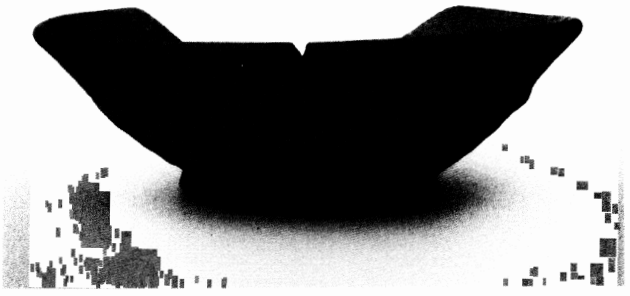
6号住居跡　遺物出土状況

7号住居跡　全景



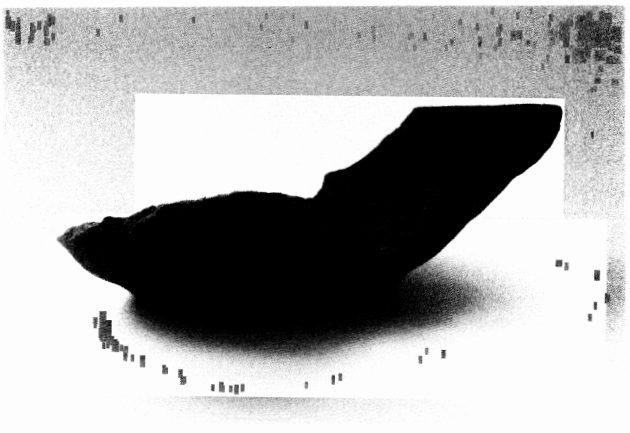
43号柱穴　全景

調査区西方柱穴群

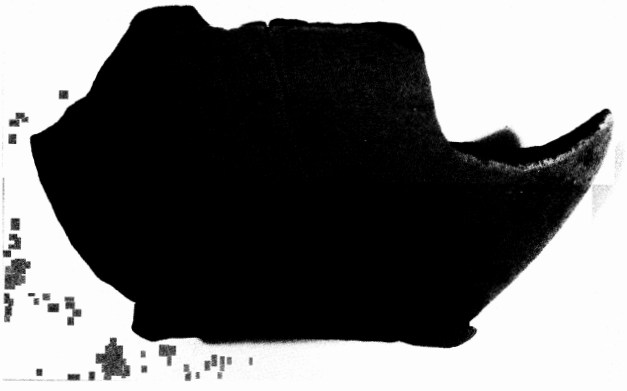


1号住3　出土遺物

2号住2　出土遺物



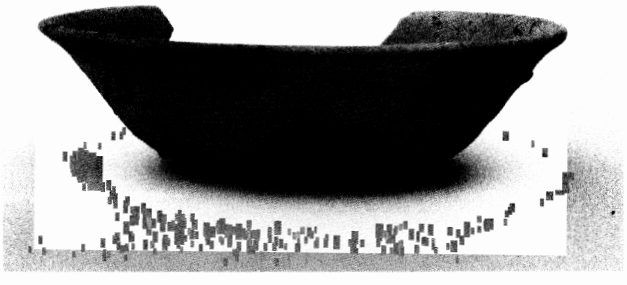
3号住1　墨書



3号住2　墨書

3号住1　墨書内面

3号住1　墨書外面



4号住3　出土遺物

5号住1　出土遺物

時沢西萩林遺跡
—宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成19年3月26日　印刷
平成19年3月28日　発行

発　行／群馬県勢多郡富士見村教育委員会
群馬県勢多郡富士見村大字田島866—1
電話027（288）6111

印　刷／朝日印刷工業株式会社